

---

北葛飾郡杉戸町

---

# 木 津 内 貝 塚

---

江戸川高規格堤防整備事業(杉戸町木津内地区)関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 3

国土交通省 関東地方整備局

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



木津内貝塚第X I 次調査航空写真（北から）



第1号住居跡貝層検出状況



# 序

利根川と荒川、そしてかつての渡良瀬川など、古来北武蔵の地は、名だたる河川との深い関わりの中でその恩恵を享受した反面、ときに甚大な被害に見舞われました。水害に立ち向かう先達の努力や工夫は、大河の大胆な瀬替えの他にも、洪水時の急流を和らげる「横手堤」や川の立体交差「伏越」などにも偲ばれます。

国土交通省では、このような先人の足跡をさらに確かなものにするため、高規格堤防の整備を進めています。別名スーパー堤防の建設は、大洪水を防ぎ、安心でうるおいのある生活環境を整えるためのものです。この事業は埼玉・千葉県境の江戸川でも12箇所の地区で着手され、杉戸町木津内地区もそのひとつとして建設が進められています。

同事業地内は、一部が埼玉県選定重要遺跡である木津内貝塚の範囲にあたり、縄文時代の貝塚をはじめとする先人の生活跡が残されていました。この埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず一部については記録保存の処置を講じることとなりました。そのため、当事業団が国土交通省関東地方整備局の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

すでに、木津内貝塚では杉戸町教育委員会によって10次にわたる発掘調査が行われており、詳細な報告書が刊行されています。

今回の発掘調査では、縄文時代前期中葉の地点貝塚を伴う竪穴住居跡をはじめとして、近世に至るまでの遺構を発見し、多くの土器や石器、陶磁器などが出土しました。かつての人々の暮らしをひもとく格好の資料となる貝塚はもちろん、今回はじめて発見された前期末葉の竪穴住居跡は、埼玉県での類例が極めて少ないもので、出土遺物はこれまでにないまとまったものになるなど、大きな成果を得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました国土交通省関東地方整備局、杉戸町教育委員会、並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成15年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 桐 川 卓 雄

# 例 言

1. 本書は、埼玉県北葛飾郡杉戸町に所在する木津内貝塚の発掘調査報告書である。

木津内貝塚については、すでにいくつかの発掘調査報告書が公刊されている(野中 1981・植松・細田他 2002)。本書は木津内貝塚第X I 次調査の報告であり、木津内貝塚の調査報告としては3冊目にあたる。

また、今調査に関しても、概要や要旨が発表されているが(福田 2001・末次 2002)、本書をもって最終報告とする。

2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

木津内貝塚第X I 次 (K Z U T)

埼玉県北葛飾郡杉戸町大字木津内字相野谷

240 番地他

平成 13 年 8 月 6 日付け教文第 2 - 48 号

3. 発掘調査は、江戸川高規格堤防整備事業(杉戸町木津内地区)に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 本事業は、第 I 章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については、末次雄一郎の補

助を受け、西井幸雄・福田聖が担当し、平成 13 年 5 月 1 日から平成 13 年 7 月 31 日まで実施した。

整理・報告書作成作業は、黒坂禎二が担当し、平成 14 年 10 月 1 日から平成 15 年 3 月 24 日まで実施した。

5. 発掘調査時の遺跡基準点測量および航空写真撮影は株式会社ムサシノに委託した。

6. 発掘調査時の遺構等写真撮影は、担当者と末次が行った。また、整理作業時の遺物写真撮影は大屋道則が行った。

7. 出土品の整理及び図版の作成は、黒坂が行った。報告書本文の執筆は、I - I を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、その他を黒坂が行った。

8. 本書の編集は、黒坂があたった。

9. 本書にかかる資料は、平成 15 年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

10. 発掘調査から整理・報告書作成のあいだ、以下の方々より、ご教示・ご協力を賜った(敬称略)。  
井上純子・植松 剛・荏原 淳・奥野麦生・鬼塚知典・島村 薫・田中和之・長谷川清一・横川好富



# 凡 例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。  
また、各挿図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。
2. 本書で扱うグリッドは、座標値X=5.620、Y=-3.680を原点とし、南東方向に10m×10mを単位として設定している。呼称は、方眼の北西隅の杭名称を用い、原点のA 1より東方向へアルファベット、南方向へは数値で指数が増加する方法をとった。
3. 測量、遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。  
遺構 竪穴住居跡…1/60  
掘立柱建物跡…1/60  
溝…1/60  
単独炉跡…1/30  
土壙…1/30・1/60  
遺物 縄文土器実測図…1/4  
縄文土器拓影図…1/3・1/4  
縄文石器実測図…1/2・1/3  
その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図、概念図、上記以外の遺構等は、その都度、スケールや縮尺率を示した。
4. 測量図におけるドット指示は、次のとおりである。  
黒丸…土器  
黒四角…石器・礫
5. 測量・遺物図内の各種網部指示は以下のとおりである。  
左下がり斜線…土壌による地山  
均等な砂目…焼土  
均等な三角…貝層  
その他、個別の分割・強調については、必要に応じ、個別に指示している。
6. 断面測量図中の土層番号は、ローマ数字とアルファベットの組合せが遺跡全体に通じる基本土層、算用数字が遺構個別の観察結果を表す。
7. 本文・挿図中に用いた度量衡の記載基準は以下のとおりである。  
標高・遺構計測値…m単位  
遺物計測値…cm／g単位
8. 本書に掲載した地形図等は、以下のものを50%に縮小して使用した。  
第2図 国土地理院1/25,000地形図「宝珠花」  
第3図 杉戸町1/2,500都市計画図
9. 文中の引用参考文献は、（著者 発行年）の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末で一覧を掲載した。

# 目 次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

I 調査の概要	1	(2) 炉跡	46
1. 発掘調査に至るまでの経過	1	(3) 土壙	46
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(4) 遺構外	48
(1) 発掘調査	2	2. 近世の遺構と遺物	65
(2) 整理・報告書作成	2	(1) 掘立柱建物跡	65
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(2) 溝	65
II 遺跡の立地と環境	4	(3) 土壙	68
III 遺跡の概要	8	V まとめ	77
IV 遺構と遺物	11	引用参考文献	82
1. 縄文時代の遺構と遺物	11	抄 録	
(1) 竪穴住居跡	11		



# 挿 図 目 次

第1図	埼玉県東部の地形と木津内貝塚 ……	4
第2図	木津内貝塚と周辺の遺跡 ……	5
第3図	木津内貝塚と周辺の地形 ……	7
第4図	木津内貝塚第X I 次調査全体図 ……	9
第5図	第1号住居跡 ……	12
第6図	第1号住居跡貝層概念図 ……	13
第7図	第1号住居跡貝層調査所見(1) ……	14
第8図	第1号住居跡貝層調査所見(2) ……	15
第9図	第1号住居跡貝層調査所見(3) ……	16
第10図	第1号住居跡貝層調査所見(4) ……	17
第11図	第1号住居跡出土貝類構成種 ……	21
第12図	貝類出土遺構の構成種と主要貝の殻長 ……	22
第13図	第1号住居跡出土遺物(1) ……	23
第14図	第1号住居跡出土遺物(2) ……	24
第15図	第1号住居跡出土遺物(3) ……	25
第16図	第2号・第4号住居跡、第69号土壇 ……	27
第17図	第2号・第4号住居跡、第69号土壇遺物出土状況(1) ……	28
第18図	第2号・第4号住居跡、第69号土壇遺物出土状況(2) ……	29
第19図	第2号住居跡出土遺物 ……	31
第20図	第2号住居跡・第69号土壇出土遺物 ……	32
第21図	第4号住居跡出土遺物(1) ……	34
第22図	第4号住居跡出土遺物(2) ……	35
第23図	第4号住居跡出土遺物(3) ……	37
第24図	第4号住居跡出土遺物(4) ……	38
第25図	第4号住居跡出土遺物(5) ……	39
第26図	第4号住居跡出土遺物(6) ……	40
第27図	第4号住居跡出土遺物(7) ……	41
第28図	第4号住居跡出土遺物(8) ……	43
第29図	第3号住居跡 ……	44
第30図	第3号住居跡出土遺物 ……	45
第31図	炉跡・縄文土壇 ……	47
第32図	縄文土壇出土遺物 ……	48
第33図	遺構外出土縄文遺物(1) ……	51
第34図	遺構外出土縄文遺物(2) ……	53
第35図	遺構外出土縄文遺物(3) ……	55
第36図	遺構外出土縄文遺物(4) ……	57
第37図	遺構外出土縄文遺物(5) ……	59
第38図	遺構外出土縄文遺物(6) ……	60
第39図	遺構外出土縄文遺物(7) ……	61
第40図	遺構外出土縄文遺物(8) ……	64
第41図	掘立柱建物跡 ……	66
第42図	溝 ……	67
第43図	近世土壇(1) ……	72
第44図	近世土壇(2) ……	73
第45図	近世土壇(3) ……	74
第46図	近世土壇(4) ……	75
第47図	近世土壇(5) ……	76

# 表 目 次

第1表	出土貝類統計表(1) ……	18
第2表	出土貝類統計表(2) ……	19
第3表	出土貝類統計表(3) ……	20
第4表	出土石器一覧表 ……	63

# 図版目次

巻頭 1 木津内貝塚第ⅩⅠ次調査航空写真  
第 1 号住居跡貝層検出状況

図版 1 木津内貝塚第ⅩⅠ次調査航空写真

図版 2 遺構確認状況、調査状況遠景

図版 3 第 1 号住居跡、第 1 号住居跡遺物出土状況

図版 4 第 1 号住居跡貝層、  
第 1 号住居跡貝ブロック 1 断面

図版 5 第 1 号住居跡確認状況、  
第 1 号住居跡遺物出土状況、  
第 1 号住居跡貝層、  
第 1 号住居跡貝層調査状況、  
第 1 号住居跡貝ブロック 1 第 2 面、  
第 1 号住居跡貝ブロック 6～8、  
第 1 号住居跡貝ブロック 2 断面、  
第 1 号住居跡貝ブロック 4・5 断面

図版 6 第 2 号・第 4 号住居跡・第 69 号土壇、  
第 2 号・第 4 号住居跡・第 69 号土壇遺物・  
貝層出土状況

図版 7 第 69 号土壇貝層断面、  
第 4 号住居跡遺物出土状況

図版 8 第 69 号土壇貝層、第 4 号住居跡土層断面、  
第 4 号住居跡遺物出土状況

図版 9 第 3 号住居跡、第 3 号住居跡確認状況、  
第 3 号住居跡遺物・貝層出土状況、  
第 3 号住居跡遺物出土状況、  
第 3 号住居跡貝ブロック 2・3

図版 10 第 44 号土壇遺物出土状況、第 44 号土壇、  
第 1 号炉跡、第 73 号土壇、  
第 73 号土壇遺物出土状況

図版 11 第 1 号・第 2 号掘立柱建物跡、  
第 1 号掘立柱建物跡

図版 12 第 1 号・第 2 号溝、第 3 号溝、第 4 号溝、  
第 5 号溝、第 6 号溝

図版 13 第 1 号土壇、第 2 号土壇、第 4 号土壇、  
第 5 号土壇、第 6 号土壇、第 7 号土壇、  
第 8 号土壇、第 9 号土壇

図版 14 第 10 号土壇、第 11 号土壇、第 12 号土壇、  
第 13 号～第 15 号土壇・第 18 号土壇、  
第 16 号土壇、第 17 号・第 19 号土壇、  
第 28 号・第 41 号土壇、  
第 29 号・第 30 号・第 38 号土壇

図版 15 第 20 号～第 27 号土壇  
第 39 号土壇、第 40 号土壇、  
第 43 号・第 46 号・第 67 号土壇、第 45 号土壇

図版 16 第 49 号・第 50 号・第 53 号・第 57 号土壇、  
第 51 号・第 52 号・第 54 号～第 56 号・第 58 号  
～第 62 号土壇

図版 17 第 47 号土壇、第 48 号土壇、第 63 号土壇、  
第 65 号・第 66 号土壇、  
第 68 号・第 70 号・第 71 号土壇、第 72 号土壇、  
第 74 号土壇、第 75 号土壇

図版 18 第 4 号住居跡出土土器

図版 19 第 4 号住居跡出土土器  
第 69 号土壇出土土器

図版 20 第 1 号住居跡出土土器  
第 4 号住居跡出土土器

図版 21 第 4 号住居跡出土土器  
第 1 号住居跡出土土器

図版 22 第 1 号住居跡出土土器

図版 23 第 2 号住居跡出土土器

図版 24 第 69 号土壇出土土器  
第 4 号住居跡出土土器

図版 25 第 4 号住居跡出土土器

図版 26 第 4 号住居跡出土土器

図版 27 第 4 号住居跡出土土器

図版 28 第 4 号住居跡出土土器

図版 29 第 4 号住居跡出土土器  
第 3 号住居跡・第 73 号土壇出土土器



図版 30 遺構出土石器  
遺構外出土土器  
図版 31 遺構外出土土器  
図版 32 遺構外出土土器  
図版 33 遺構外出土土器  
図版 34 遺構外出土土器

図版 35 遺構外出土土器  
図版 36 遺構外出土土器  
図版 37 遺構外出土石器  
出土土製品類  
図版 38 第 1 号住居跡出土貝類

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局江戸川工事事務所では、洪水による被害を防ぐための治水事業としてスーパー堤防事業を行っている。

江戸川に面した杉戸町木津内地区においても、洪水時における水防活動を支援するための、復旧活動の拠点や資材等を備蓄する水防拠点の整備を進めることと、スーパー堤防と一体で「環境センター（ごみ焼却場）」の建設が行われてきた。今回は、隣接地に「リサイクルセンター（粗大ごみ処理場）」が計画されることとなり、引き続きスーパー堤防と一体で整備を目指す事となった。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、この事業の推進に伴う埋蔵文化財の保護について、従前より江戸川工事事務所と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、国土交通省江戸川工事事務所長より教育長あて、平成13年2月16日付け江調第15号で、埋蔵文化財の所在について照会があった。

これに対して文化財保護課では確認調査を実施したうえで、平成13年3月5日付け教文第1161号で木津内貝塚の取り扱いについて次のように回答した。

### 1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が存在する。

名 称 (No.)	種 別	時 代	所 在 地
木津内貝塚 (No.89－036)	貝 塚 集落跡	縄 文	杉戸町大字木津内 字相野谷240 他

### 2 取扱い

上記の埋蔵文化財は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条3の規定に基づく埼玉県教育委員会教育長あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団・江戸川工事事務所・文化財保護課の三者により、調査方法・期間・経費等についての協議が行われた。その結果、調査は平成13年5月1日から7月31日まで実施された。

江戸川工事事務所長から文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、調査に先立ち、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査届に対する指示通知番号は以下のとおりである。

平成13年8月6日付け 教文第2－48号

(埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課)



## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

〔平成13年5月〕

上旬、現場事務所設営や機材搬入の準備作業に着手するとともに重機による表土掘削を開始する。

中旬、表土掘削終了後、補助員による遺構の確認作業を行い、検出できた遺構について順次精査に着手する。

下旬、遺構確認を完了し、遺構を精査するとともに、測量作業を開始する。

〔平成13年6月〕

上旬、遺構精査を継続し、各遺構の作業進行別に実測・写真撮影作業も行う。

中旬、引き続き、遺構精査・測量・写真撮影作業を行い、土壌等、近世遺構の調査にめどをつける。

下旬、縄文遺構の精査を継続するとともに、6月23日、現地説明会を開催し、地元住民を中心とした154名の来跡者を迎えた。

〔平成13年7月〕

上旬、遺構精査・実測・写真撮影作業を続けながら、旧石器時代遺物の確認作業に着手する。また、これらと並行しながら遺跡航空写真撮影のための清掃作業を行う。

中旬、遺跡航空写真撮影を実施した上で、縄文遺構の精査と旧石器時代確認作業を完了する。そして、事務所を撤去し、現地での調査を終了する。

下旬、貝類を含めた出土遺物の仕分けと、各種届けや実績報告等の書類を作成する。

### (2) 整理・報告書作成

〔平成14年10月〕

上旬、出土遺物・貝類および図面・写真類を搬入後、遺物類の水洗・注記に着手する。あわせて、図面・写真類の照合作業を開始する。

中旬、前述の作業を継続するとともに、測量図面の整理作業、土器接合作業を始める。

下旬、中旬の作業を続け、遺物・貝類の水洗・注記作業を終了する。

〔平成14年11月〕

上旬、前月来の作業を継続するとともに、土器破片資料の拓本採拓作業、土器・石器の実測、貝類統計作業に着手する。

中旬、図面整理、接合復元作業を終了する。

下旬、遺物の実測、拓影図作成、貝類統計作業を続ける。

〔平成14年12月〕

上旬、前月までの作業を完了し、遺構・遺物図のトレース、版組、版下作成に移行する。あわせて、遺物の写真撮影を行い、さらに事実記載原稿の執筆を開始する。

中旬、挿図・写真の版下作成、および原稿の執筆を続ける。

〔平成15年1月〕

中旬、写真図版を含めた版下作成作業、原稿執筆作業を継続・完了し、入稿する。

下旬、入稿原稿の確認校正等を行う。

〔平成15年3月〕

下旬、2・3月あわせて3回の校正を経て、報告書印刷、刊行に至る。

### 3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

( 1 ) 発掘調査 (平成 13 年度)

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 舘 健

管理部

管 理 幹	持 田 紀 男
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久

調査部

調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
専門調査員 (調査第一担当)	村 田 健 二
統 括 調 査 員	西 井 幸 雄
主 任 調 査 員	福 田 聖

( 2 ) 整理事業 (平成 14 年度)

理 事 長	桐 川 卓 雄
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 舘 健

管理部

管 理 幹	持 田 紀 男
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久

調査部

調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
主席調査員 (資料整理担当)	磯 崎 一
統 括 調 査 員	黒 坂 禎 二

## II 遺跡の立地と環境

木津内貝塚は、東武伊勢崎線東武動物公園駅より東方へ約 6.5 km の埼玉県北葛飾郡杉戸町大字木津内に所在する。貝塚は、古くより県北東部の代表的な遺跡として知られており、昭和 44 年には埼玉県選定重要遺跡に指定されている。

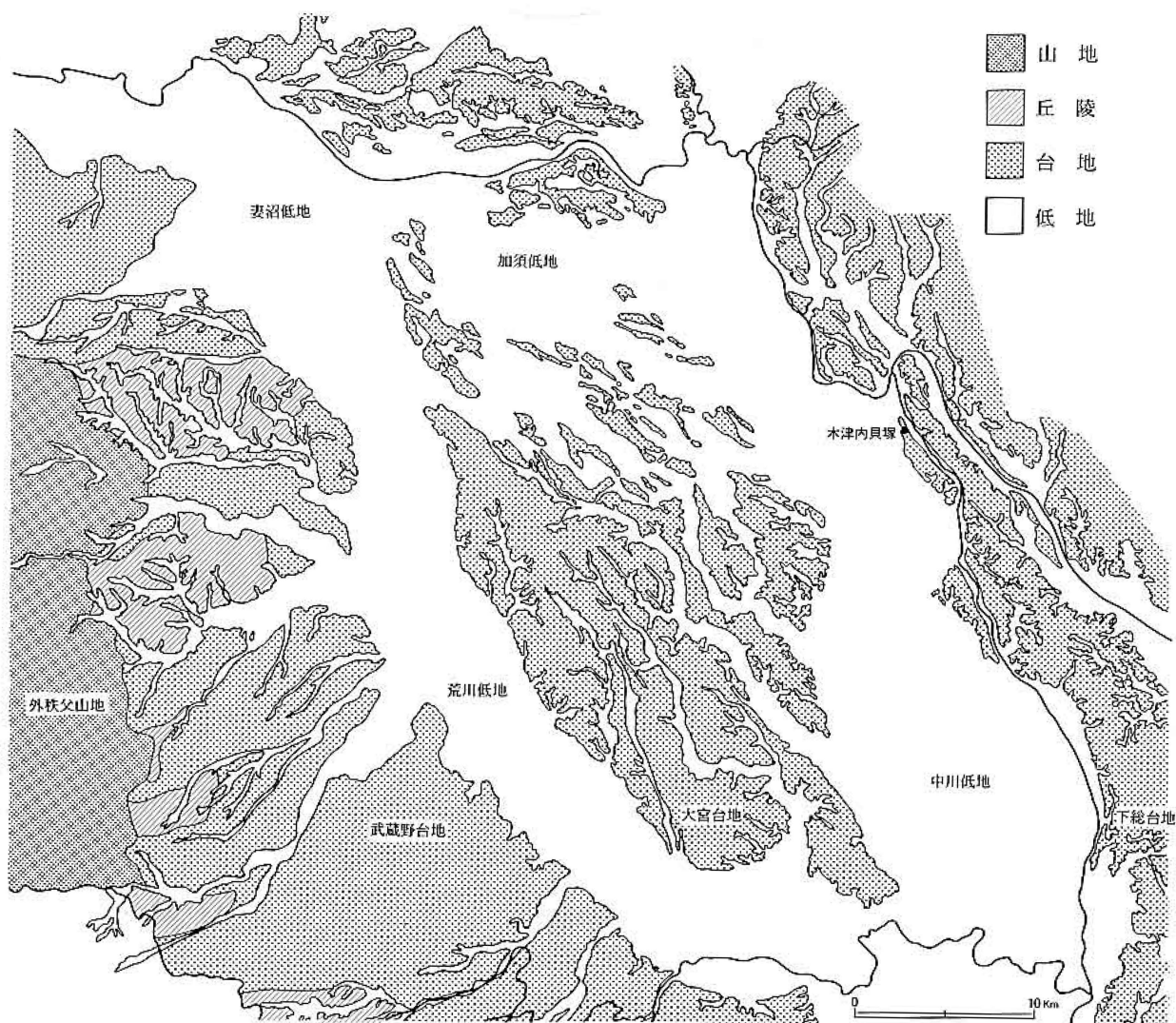
この地は、中川低地帯にほど近い下総台地の北西辺にあたる。往古より、関東中央部は多くの大河川が乱流し、広大な低地帯を形成した。遺跡の西方では渡良瀬川を従えてさらに嵩を増した利根川が乱流し、さらに西方の大宮台地の北東方を流下していた荒川と相まって広大な中川低地帯が形づくられた。この景観は近世まで変わらず、後に庄内領となる村々

では度重なる洪水に悩まされていた。

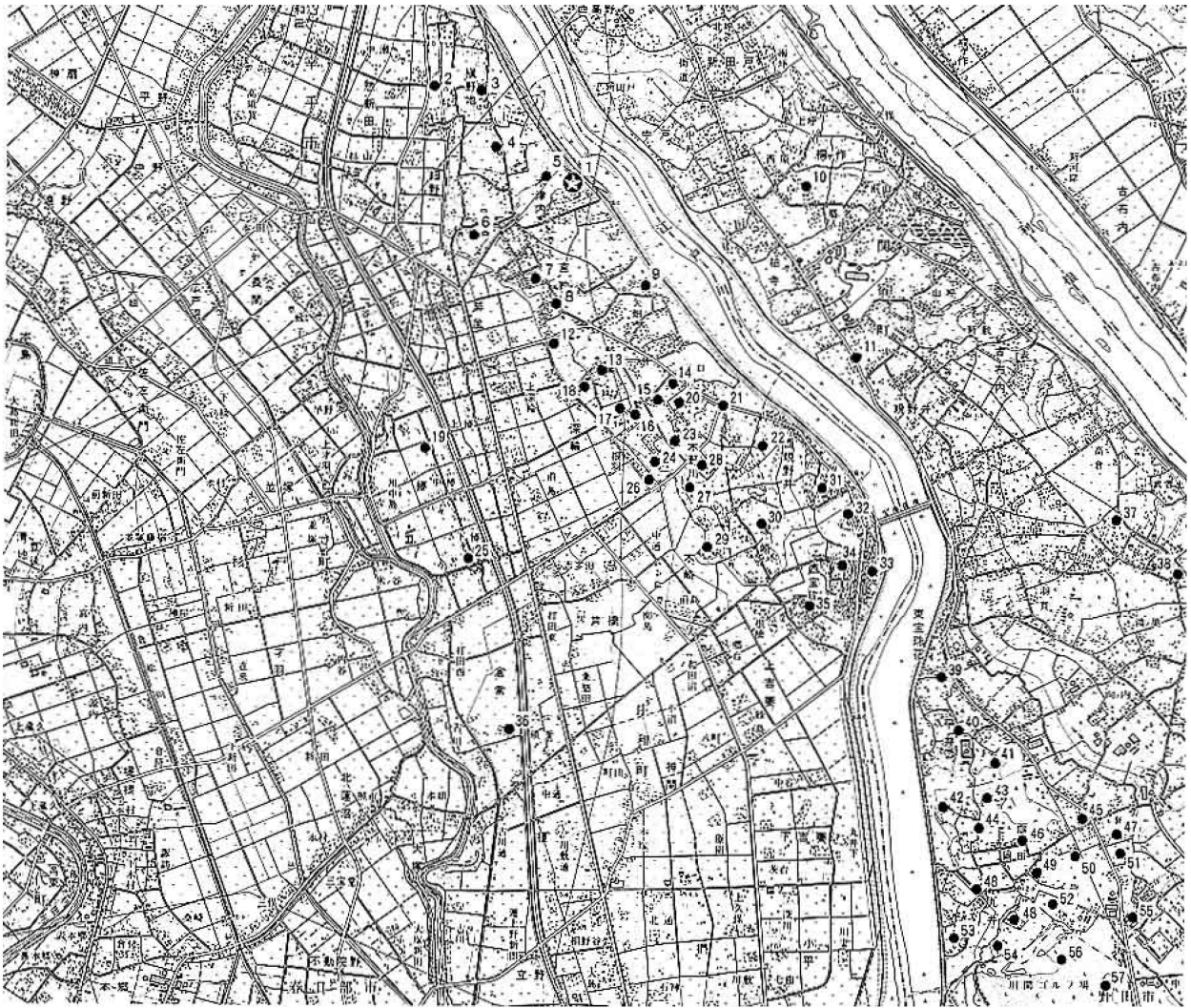
徳川家康関東御入国後ほどなく、江戸幕府は北武蔵に関東郡代を置き、江戸北方の経営を行った。初期の郡代伊奈忠治は当地のさまざまな開発に着手し、優れた業績を上げ、その名を残したが、彼が指揮した最も大きな事業は、下流域江戸の水害防止と中流域の新田開発をめざした治水対策であった。

荒川を入間川水系に接続し、利根川を鬼怒川の谷に切りまわすとともに、銚子沖から江戸への効率的な水運経路として江戸川を開削し、合わせて中川低地帯の治水に挑み、さらなる開発を目論んだ。

江戸川の開削は、旧谷を利用しつつ、一部台地を



第1図 埼玉県東部の地形と木津内貝塚



第2図 木津内貝塚と周辺の遺跡

切り開いて蛇行を修正した。遺跡付近の江戸川は下総台地を貫通して設定されており、これにより、台地は分断され、川の西方、現在の幸手・杉戸・庄和・松伏の一市三町にまたがる南北に長い一帯が武蔵国へと所属替えになり、現在に至っている。

下総台地は千葉県を中心とした広大で安定した台地であり、西南方の市川市付近では急激な段丘崖が認められる。だが、北西方では、往時の鬼怒川や利根川の浸食によって鋭い剣先状となり、低地堆積物の累積により、縁辺の比高差は少ない。

現状はともあれ、このあたりは縄文海進の頃に古東京湾で最も奥に海水が流入したと考えられており、中川低地帯の旧利根川・渡良瀬川筋をたどれば古東

京湾最奥の貝塚とされる栃木県藤岡町篠山貝塚（中村 1981）に行き着く。

以下、常総台地南西部、大宮台地北東部、下総台地西部などに点々と貝塚が残されているが、その分布密度が最も濃いのが木津内貝塚が立地する下総台地西部である。

木津内貝塚周辺には千葉県関宿町の内町貝塚（関宿町教育委員会 1982）から始まり、前出の一市三町や千葉県側の野田・流山市、さらに下流の松戸市まで縄文時代の貝塚群が連続している。これらの貝塚は、多くが前期の前葉から中葉の海進の際に形成されている。実際、貝塚が発見されていない遺跡も含め、前期の遺跡は多く、第2図に示した範囲では



中期とほぼ同数が把握されている。わずかな遺跡にとどまった早期より転じ、海進をきっかけとしてこの地が他にも増す繁栄を迎えたのは確かだろう。

付近で調査が及んだこの期の貝塚は、関宿町飯塚貝塚（岡田 1989）、下根遺跡（石井 1982）、杉戸町目沼貝塚（7、早川・庄野 1964）、鷺巣貝塚（14、杉戸町教育委員会 1997）、鷺巣前原遺跡（17、島村・植松 2003）、庄和町神明貝塚（22、柳田他 1970）、貝の内遺跡（34、貝の内遺跡調査会 1989）、宮前遺跡（荏原 2001）、原遺跡（長谷川 2000）、風早遺跡（青木 1979、長谷川 2000）、吉岡遺跡（金澤・長谷川 1999）、尾ヶ崎遺跡（庄野 1984）、野田市槇の内遺跡（下津谷・飯塚 1981、下津谷・金山 1987）、東金野井貝塚（野田市博物館 1981）など、枚挙にいとまがない。神明貝塚では後期、風早遺跡では中期の貝層も形成されていたが、他は関山から黒浜期の住居跡内に貝類が投棄された、いわゆる地点貝塚がもっぱらである。

これに対し、前期も後半になると遺跡の数はにわかに減少する。貝塚の形成も、野田市北前貝塚（村田 1979）などの例もあるものの、ほとんど見られず、浮島・興津期の数少ない住居跡が発見された庄和町作之内遺跡（長谷川 2002）や愛宕遺跡（金澤 1997）でも、埋土への貝類の投棄は見られなかった。

また、東西関東の地域差の発露とともに、中川低地帯以東は、ごく希な少数の遺跡を除き、浮島・興津系の土器が主体となり、東関東系土器が優勢となる状態は中期の阿玉台系に至るまで継承される。以降、中期の中葉に至るまで、住居跡をはじめとする遺構の構築は低調となり、調査で出会うのは遺構外の出土品が多くなる。

ところが、中期も後半に至ると遺跡の数は再び増加に転じ、地点貝塚も少ないながら発見されている。だが、住居跡が検出されている前述の風早遺跡や作之内遺跡などの成果を見る限り、遺構の検出数から想像できる遺跡の規模は前期に及ぶものではない。そして、その後、再び遺跡の数は急減し、後期に至

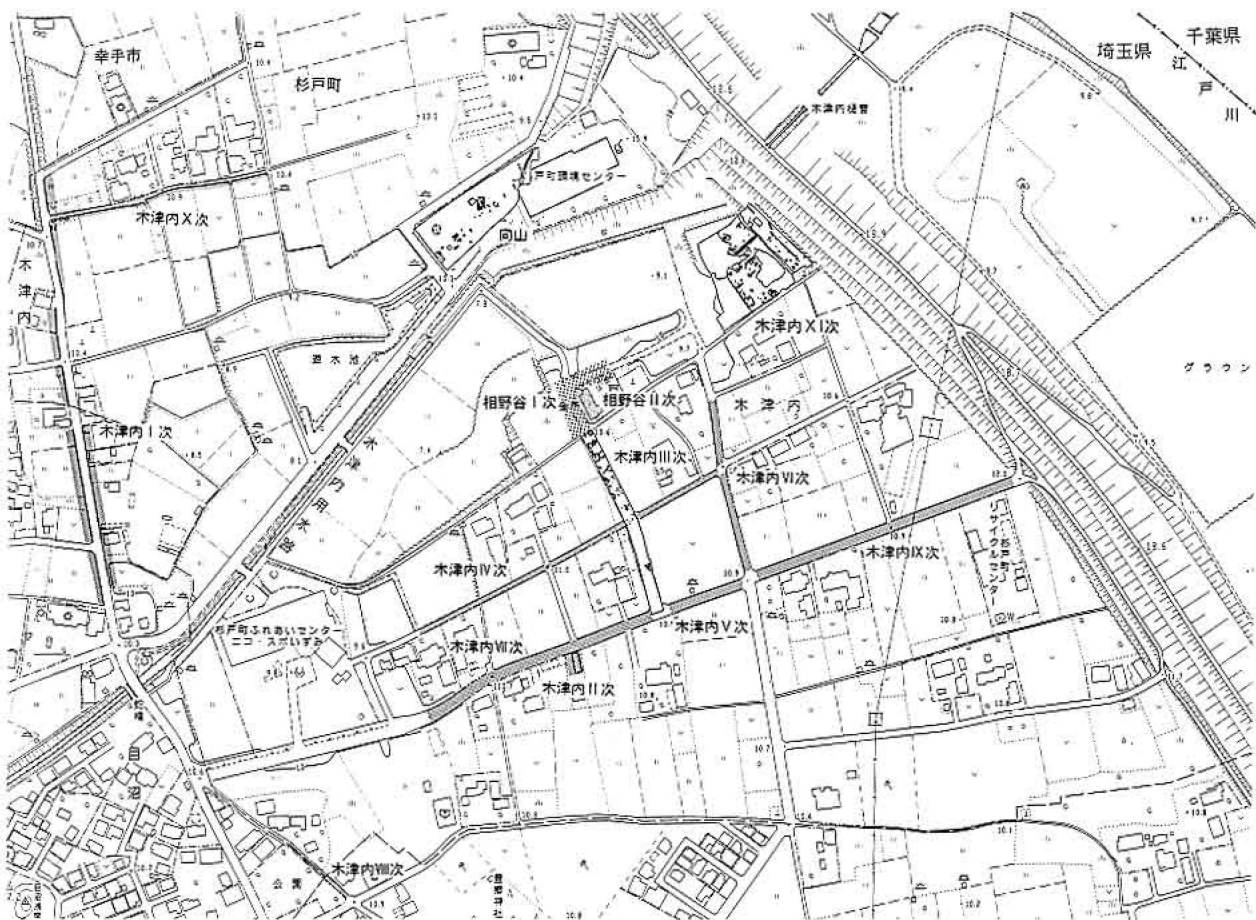
ると先の神明貝塚で住居跡や埋葬施設などの成果が得られているにすぎず、晩期を経て弥生時代を通した長い空白期が続く。

遺跡の周辺に再び槌音が響くのは古墳時代に至ってからで、前期にはいくつかの集落跡が、そして後期には、小規模ながら、古墳の築造も行われるようになる。木津内貝塚と同じ台地上には杉戸町目沼古墳群（6、高橋・駒宮 1981）をはじめとして、木野川古墳群（27）など、多くの古墳が今も残されている。あるがままの地形に左右された初期の水田耕作から、土木技術を要する広大な低地帯への進出が、古墳時代に見通しを得、権力階層の発生と定着を招いたのだろう。

しかし、被葬者となる権力層を支える集落は、そう多く見つかっているわけではない。台地上では向山遺跡（5、植松・細田他 2002）、宮の腰遺跡（16、島村 1999）、向台遺跡（21）などで古墳時代の住居跡や祭祀土壇が発見されているが、その数は少ない。この時代の集落の大半は中川低地帯に点在する自然堤防上に展開していたと考えるのが有力だが、後世の頻繁な水害も災いし、現状で把握されている遺跡の数は台地上にくべると極端に少ない。

そのようななか、中川低地の自然堤防上に立地する庄和町須釜遺跡では、弥生時代中期の再葬墓群などが発見された（長谷川 2001）。これにより、往時における低地利用の一端を垣間見ることが可能となり、俄然、弥生・古墳時代に形成された未発見遺跡の存在が現実味を帯びてきた。

中川低地帯ではこれまで、自然堤防上の上樁遺跡（19、山本他 1974）、下樁遺跡（25、宮 1982）などで古墳時代後期から古代にかけての集落跡がわずかに調査されただけであった。しかし、現在の古利根川の付近を中心に、良好な自然堤防が多く点在しており、弥生ならずとも、遅くとも古代には稲作を前提とした低地への進出に弾みがつき、大規模で集団的な土木技術を駆使した流域の総合開発の段階を迎えると考えられる。



第3図 木津内貝塚と周辺の遺跡

そして、中世には耕地開発も定着したようで、「庄内」の地名が成立している。だが、これとても、ことあるごとに名だたる大河のうねりにに翻弄され続けていたようで、江戸川開削の直接の目的は、この周辺の治水に最終的な決着をつけた上での沿岸開発にあったとされる。

また、開削によって、関東随一を誇る水運路の沿岸となった周辺では、拠点となった関宿の他にも、物資や旅客の盛んな往来をあてに西関宿（幸手市）・西宝珠花・西金野井（庄和町）などの小規模な河岸が林立し、商工分野の発達も促された。さらに、中川低地帯の自然堤防をたどるように奥州道中が整備され、道中第五の宿場となる杉戸宿は江戸期を通して繁栄を極めた。

だが、江戸川や中川低地の大小河川は、その後も時々の土木技術を超える力を見せつけ、度重なる氾

濫をおこした。幕府や明治政府は幾度も堤防の拡幅や流路の開削を繰り返し、最終的には昭和22年の大改修によって現在の光景が生み出された。流路の最大幅は、享保年間に行った大改修時の実に3倍へと成長していた。当然のことながら、下総台地本体との分断は拡大し、東西の字が冠された同地名に往時の名残を偲ぶものの、巨大な堤防を隔てた兩岸の文化的な交流は希薄になりつつある。

今、堤防を背に木津内貝塚の現地に立つと、現在の行政区画意識も手伝って、実は江戸川を隔てた東方から湾入する遺跡北の谷でさえも視野のなかで終始するような錯覚におそわれる。だが、かつて下総に属したこの地での調査は、そのような錯覚を払拭するような東関東的な色合いの濃い成果を得ることになった。詳しくは次章を参照されたい。

### III 遺跡の概要

木津内貝塚は、道路整備などを原因として、既に10回に及ぶ調査が行われており、杉戸町教育委員会によって大部分の遺構と人工遺物の報告がなされている(野中1981、植松・細田2002)。

細かな数値は同町報告に譲るが、これまでの調査では、縄文時代前期の前葉から中葉にかけて、具体的には関山Ⅱ式期から黒浜式期にかけての竪穴住居跡が数多く発見されており、一部では廃屋を利用した地点貝塚が形成されていた。

今回の調査は江戸川の高規格堤防建設に先立つ事前調査であり、木津内貝塚としては11回目の調査にあたる。対象は江戸川の堤防敷地に接した約3,900 m<sup>2</sup>であり、約3ヶ月をかけて調査を実施した。

南北を軸にしてそのままに台形を置いたような対象地のうち、西側の1/4はすでに削平を受けたり、頻繁な攪乱によって遺構の検出は不可能であった。また、調査可能な東側でもそこここ近年の攪乱が残り、被害を受けた遺構も少なからずあった。

検出できた遺構は、縄文時代前期中葉の竪穴住居跡2軒、同期の単独炉跡と土壇各1基、前期後葉の竪穴住居跡2軒、土壇2基、そして、近世の掘立柱建物跡2棟、溝6条、土壇71基であった。

これらのうち、縄文時代前期中葉の遺構は、すべて黒浜式土器を主体とする構築期にあたる。住居跡は、2軒ともほぼ方形の浅い掘込みをもち、壁際施設は発達せず、4本の支柱と北方の柱間に炉跡を設ける型であった。

また、土壇では、全形が判明する3個体の土器が中層よりまとまって出土した。これらは、文様構成の取り合わせを選別した上で投げられた気配もあり、直下で出土した貝類のいわれとも相まって、日常生活とはかけ離れた行為を連想させる。

これに対し、前期後葉の遺構は東関東系興津式土器を主体とする時期に構築されている。2軒の住居跡は、ともに台形で深い竪穴を掘り込み、壁溝が全

周するとともに中央の2本の支柱を下底と上底近くの4本が補う共通の配置が見てとれた。

さらに、2基の土壇のうち、住居跡と重なるものは、前期後半に散見される型であった。埋没途上の住居跡を意識し、これを破壊するかのようにやや大型の土壇を掘削する。旧住居跡の壁を破壊することが多いが、ここではほぼ中央を貫いている。そして、中層では投棄された貝類が検出できた。

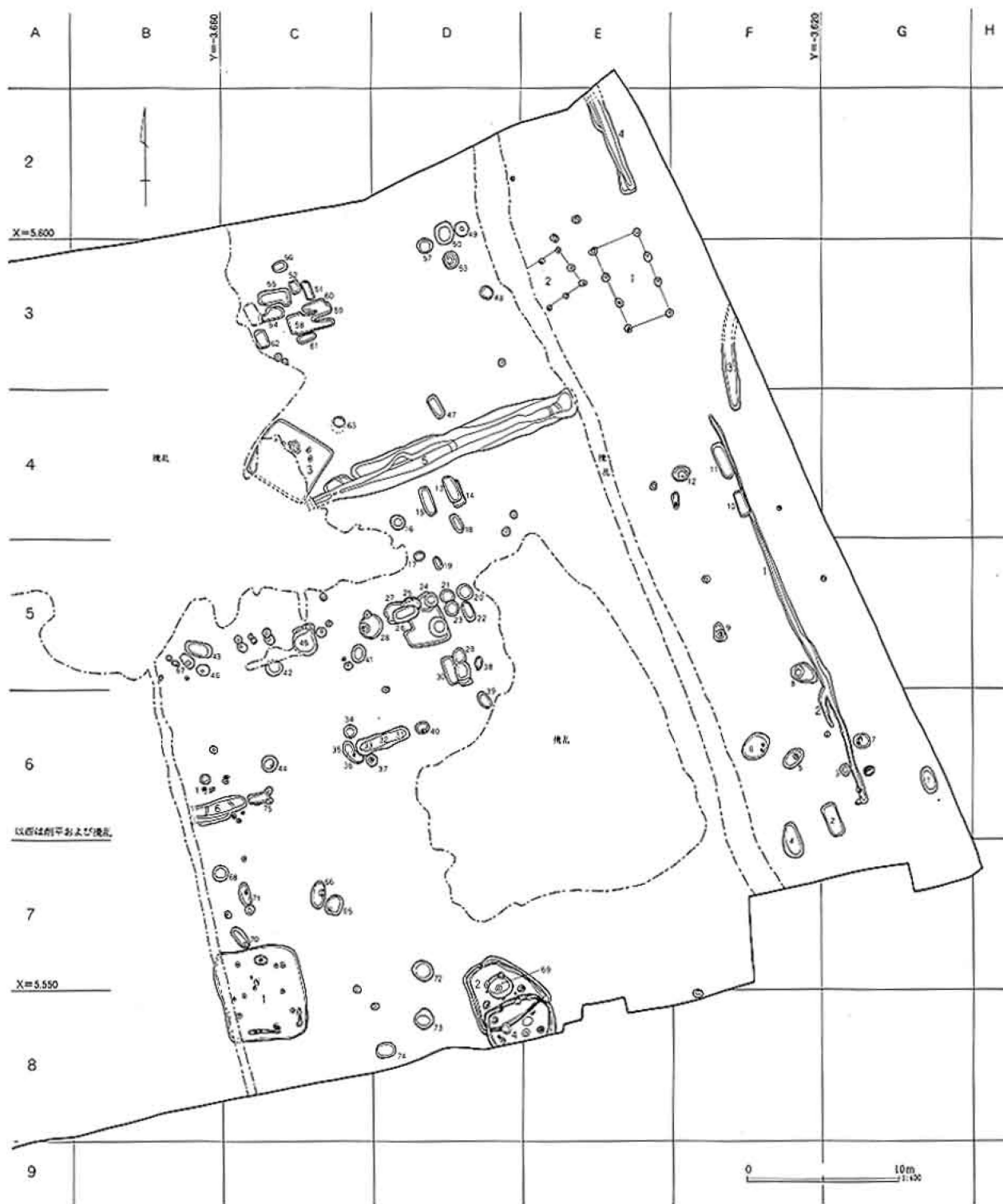
貝類は、既述した土壇2基の他に、黒浜期の住居跡2軒でも発見された。いずれも埋没途上の窪地に投棄のための穴を掘り、貝塚が形成されていた。

これら四遺構から出土した貝類を選別するためにサンプリングした土貝は、総計でコンテナ292箱、土を落とした後でも216箱、総重量316,496 gにも及んだ。だが、このうちの80%超が第1号住居跡で占められており、他は散発的である。そのため、各種の統計値も同住居跡の項で扱った。

貝層の調査は、小規模なブロックについては範囲と所見を記録後、一括して取り上げた。対して、大量の貝類が見つかった第1号住居跡では、貝層のまとまりによって9のブロックに分けて基本の単位とし、座標軸に沿う0.5 m四方を基調として小ブロックに細分した。そして、最上の調査開始面を第一面とした上で、標高0.05 m単位で掘り下げを行い、順次調査面の指数を増加させた。したがって、各小ブロックの貝層厚や垂直分布位置などで調査面の枚数の違いやズレが生ずることとなる(第6図)。

また、個体数の算定は、殻長が1/2以上遺存しているものを扱い、斧足網については1/2を乗じた後に小数点以下1位を切り上げた。

各遺構から出土した貝類は、アサリが主体となる点では共通している。しかし、その比率や他の貝種についてはいくつかの偏差があった。これは、採取場所や調理単位、あるいは同年内での時期差なども想像できるが、とくに前期中葉と後葉の年代差に帰



第4図 木津内貝塚第X I次調査全体図



すると考えられる差が顕著であった。

最も多くの貝類が出土した前期中葉の第1号住居跡では、全体、そして各ブロックでみても、アサリ他にハマグリとシオフキが常に一定の比率を占めていた。また、全体比などから見るとごく少量にとどまるが、アカニシ・サルボウ・ナミマガシワ・マガキ・カガミガイなどが目にとまる。これは、同じ投棄時期にあたる第3号住居跡でも、細かな変動はあるものの、大勢で共通している。

これに対し、前期末葉に投棄された第69号土壇の貝ブロックでは、ハマグリ・シオフキがなりを潜め、オキシジミ・マテガイがこれに代わる位置を占めている。また、マガキはまったく出土せず、サルボウ・ナミマガシワ・カガミガイも普遍性が乏しくなる。そして、前期中葉に見られなかったオオノガイが散発的に採取されている。

貝種構成に相違あるものの、年代差による成長度の顕著な違いは認められなかった。これらは概して小さめで、大宮台地の前期中葉期の貝塚と比べるとかなり見劣りがする。湾奥に立地する木津内貝塚の位置そのものが原因と考えられる。

この他、捕食された鹹水産貝類の他に、貝塚の生ゴミに集まったと思われる陸産の微小貝類が多く見つかっている。今回の整理では、これらを個々に同定するゆとりを持たなかったが、大半がオカツチキレガイ科、キセルガイ科、コハクガイ科、ベッコウマイマイ科などに属すると考えられる。

一方、縄文の人工遺物はコンテナ約25箱が出土した。その時期は遺構の構築期に集中する。だが、前期中葉黒浜期では、器形を推し量ることができる3個体の土器が出土した土壇を除き、比較的散漫な分布が見られたのみで、出土量は多くない。

今回の調査で注目されるのは、前期後葉興津期の遺物である。とくに、第4号住居跡では覆土中層にまとまった土器類が投棄されており、東関東系主体の組成のなかに西関東系の諸磯c式土器が共伴することが確認できた。また、上層では、興津式以降と

想定できる個体が西関東十三菩提式初頭相当の個体と同じような分布状況で出土した。

多くの遺物が出土した第4号住居跡は、ほぼ同じ時期に構築された第2号住居跡・第69号土壇と重複していた。幸運にも埋土の識別は容易であり、確信のもてる先後の判定を下すことができた。これをたよりに土器の出土相も何らかの指針を見取ることができるかと期待したが、重複両遺構の出土量が乏しく、そのもくろみはかなわなかった。

これに対し、遺構外では早期撚糸文系から後期堀之内、さらには安行系までの土器が出土している。このなかで最も充実していたのが中期前半の土器である。五領ヶ台式後半から阿玉台I b式までが出土しているが、主体となるのは埼玉県としては数少ない阿玉台I a式である。

石器は、下流域の立地としては比較的多く出土した。大方が前期の所産と考えられるが、乳棒状磨製石斧など、時期比定が確立してる器種の出土は少なかった。石鏃・削器類・打製石斧なども出土しているが、個数としては磨石・石皿類の粉碎具が多い。これら石器類は、黒曜石・チャートをはじめ、砂岩・ホルンフェルス・安山岩など、原材のバラエティーに富み、さまざまな河川の影響を受けた中川低地帯を臨む下総台地北西端のならではの豊富さであった。また、遺構内外から土製の块状耳飾3点、土製円盤類4点なども出土している。

時代降り、近世期の遺構は現江戸川に沿うような方位性をもって構築されているものが多かった。6条発見された溝は、連携をもつかは別として、おのおのその区画を成するものと考えられる。

また、土壇は長方形を基調とするものが多く、溝の方位性に沿いつつ密集して繰り返して構築されている例も多い。そのため、基数の把握に失敗した例もある。さらに、一部の土壇には灰が含まれており、それで用途の共通を把握することもできるが、具体的なそれは特定できなかった。



## IV 遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡(第5図～第30図)

#### 第1号住居跡(第5～15図、第1～3表)

調査区の南西方、C-7・8グリッドで検出した。西側の壁に沿って埋設管の攪乱が貫くが、その幅は狭く、全形の把握には支障がない。竪穴はやや主軸方向に長じた方形で、壁面は急斜である。床面は平坦で、壁際の施設は、南東隅部を中心として壁柱穴を備えた壁溝が断続的に設けられている。

覆土の基調は、炭化物やローム粒子を含む暗褐色系の土が主体で、一部にロームブロックを多く含む自然堆積層である。そして、中層から下層では投棄された貝類が大量に出土したが、土層断面で見ると、投棄は竪穴が中層まで埋没した後に行われ、必ず埋土を掘り込んでからなされている。また、有機質の浸透遺存によるものか、周囲の土色が黒褐色化している場合がほとんどであった。

投棄に先立つ掘込みは、床面を大きく突き抜けることがなく、むしろ床面のローム土を掘削の目安とするかのように判で押したような深さであった。その範囲は大小があり、投棄の度ごとに掘削を行ったともいえない。掘削投棄の理由は、余った土で生ゴミを覆い腐臭や害虫の発生を避けるためとも考えられるが、貝ブロック2周辺の大きな掘削はこの想定に当てはまらない。

炉跡は、北側の柱穴間のやや北寄りで見えた。主軸と直交するような楕円の浅い掘込みで、炉床の硬化は認められなかった。

柱穴、および柱穴状の小穴は計12本を検出したが、このうちP1・3・5・7が梁桁を支える主柱の痕跡と考えられる。貝層はこれらを覆っているものの、対応するかのように分布が括れている。竪穴埋没途上の貝類投棄の際には少なくとも柱の下半は残存しており、その後の腐敗とともに柱穴状に貝の一部が崩落したものともとれる。

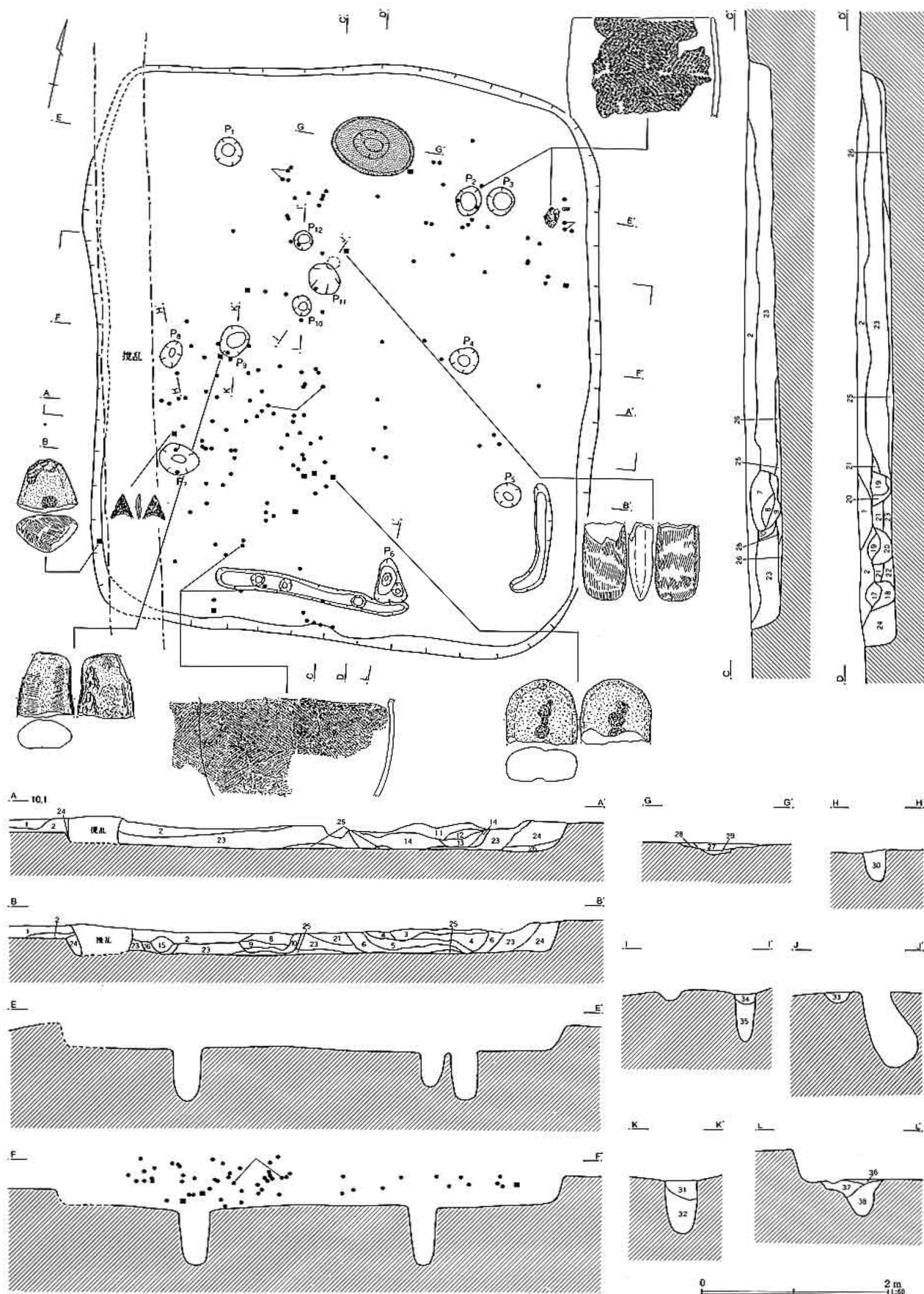
また、主柱の配置と呼応するかのように主軸を対称軸として分布しているのがP4・9である。南北主柱間の結線よりはやや内側に入るものの、主柱と連動した配置であることは疑いない。同じような柱穴配置は両神村薬師堂遺跡(黒坂1992)などでも検出されており、こちらでは4本の主柱に柱痕が観察できるにもかかわらず、中間柱の覆土上層や中層には石皿や扁平礫が横たえられていた。したがって、木津内例も立柱をしてないか、主柱と同じ立柱法をとらなかったことは確かだろう。

さらに、P6は壁に向かって片流れになる形状から、入り口の施設が想定でき、P11・12の2穴は、その位置関係から「Cピット」(笹森1981)に相当すると考えられる。

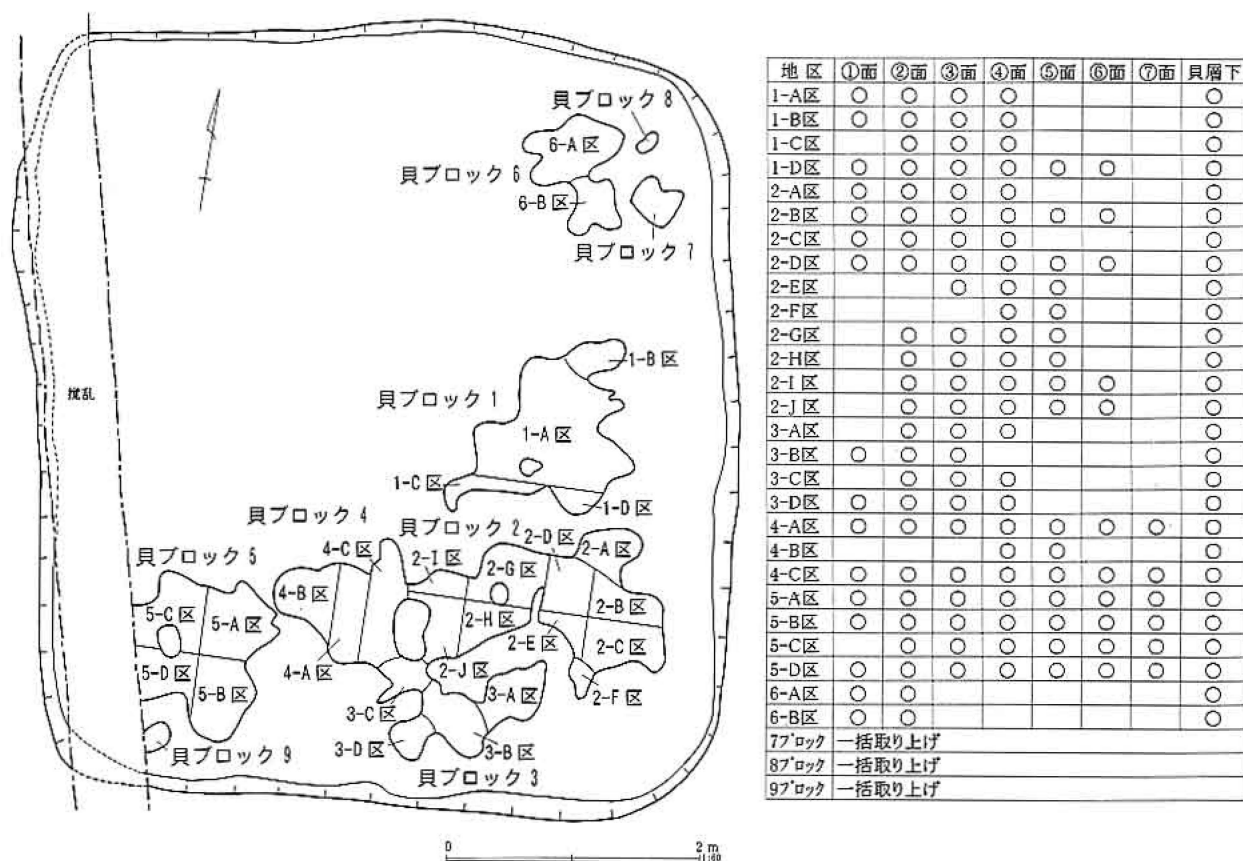
一方、覆土を一段掘削したうえで、その窪みに投棄された貝類は総重量で260,198gにも及ぶ。分布は南と東の壁際に偏り、量的にはとくに南方に集中している。貝類のサンプリングは、これらをさらに分布の間隙を目安に9のブロックに分けて行った。詳しい調査法や個体数の算定方法などは第三章で紹介しているので、そちらを参照していただきたい。第6～10図には、具体的なブロックや区分け、取り上げ面などの概念図と調査時の所見をそのままに図化、掲載した。また、統計表と各種統計図は、それぞれ第1～3表、第11・12図に示した。

このなかで、7～9ブロックは小規模なものであり、層厚も薄いことからすべてを一括して取り上げた。加えて、貝ブロック8は、そもそも少量の投棄であった上に混土化による劣化が著しく、統計に足る個体数を確保できなかった。

出土した貝の種類は、鹹水産で沿岸湾奥の砂泥底に生息するものが主体となり、貝塚一般の検出貝種数に比較すると、その数は比較的少ないといえるだろう。また、統計表に示した貝類の他に、フジツボ



第5図 第1号住居跡



第6図 第1号住居跡貝層概念図

が2点ほど出土している。

貝類の種別量比は、すべてのブロックにわたってアサリ・ハマグリ・シオフキの三種が他を圧倒しており、大きく引き離されて、カガミガイ・ナミマガシワ・サルボウ・アカニシなどがこれに続く。主要三貝種を除いた他の貝種は、例えば貝ブロック1でのナミマガシワや貝ブロック2でのカガミガイなど、部分的に出土比が高まることはあるものの、総量の7%を超えるものはない。

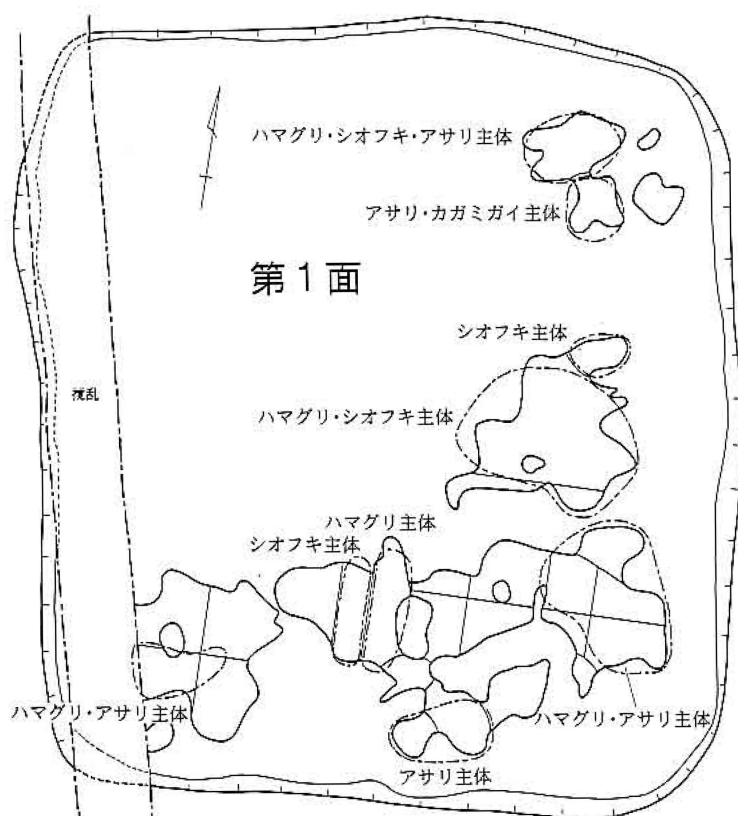
この他、陸産貝類の小マイマイ類が安定した個体数を保つ。だが、個体数算定の基準となった殻頂が残りやすい形質上の後押しもあるだろう。もちろん、これらは捕食種ではない。

さらに、第3表下を目安に、ブロック別の出土傾向を詳しく見ると、主要三貝種でも出土率に大きな偏差があることがわかる。アサリが第一でハマグリ・シオフキと続く順位は多くで共通するものの、アサ

リが過半を占める類型（貝ブロック3・5・6・9）、三者が拮抗に近い率となる類型（貝ブロック1・2）、ハマグリがアサリを凌駕するか対峙する類型（貝ブロック4・7）などがある。これが、各調査面ごとにになると、調査所見図に見るように、その偏差は増加する。

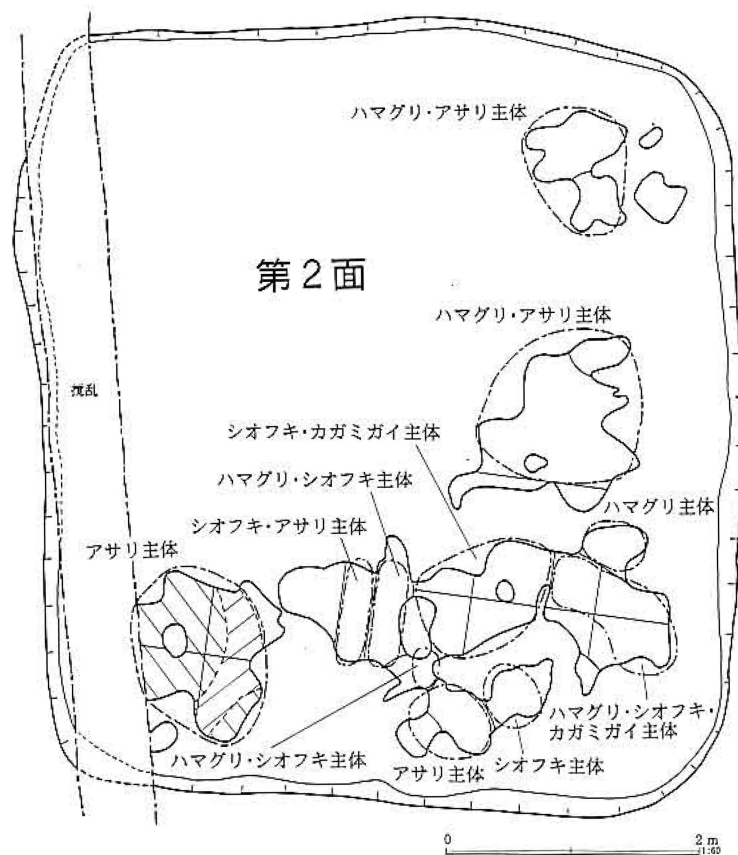
再び全体像に戻り、経年や混土での劣化によるものもあるだろうが、出土した貝の中には往時に破碎されたと見なせるものもある。だが、破碎の理由は考えが及ばなかった。

また、貝の生育度は、アサリ・シオフキはそう目立たないものの、ハマグリ・カキともに殻長3cm前後にピークをもつなど、大宮台地の前期貝塚と比較して見劣りするの否めない。ところが、全体がそうともいえず、アカニシなどは殻長5.5cmがピークになるほかに9cm前後にもう一つの山場をもつなど気をはいている。



# 第1面

- 1-A・D 区 上面は形になる貝が多い  
混土貝層で貝はしっかりしている  
黒褐色土が少量混入している
- 1-B 区 貝の形はしっかりしている  
混土貝層で黒褐色土が少量混入している
- 2-A・D 区 混土貝層でサルボウも目立つ  
主体混入土は黒褐色土で上面に少量の  
暗褐色土の混入がみられる
- 3-B・D 区 混土貝層で形になる貝が多い
- 4-A 区 混土貝層で形になる貝が多い
- 5-A・B・D 区 混土貝層で形になる貝が多い  
貝の量も多い
- 6-A 区 上面は形になる貝が多い  
混土貝層で貝はしっかりしている  
黒褐色土が少量混入している
- 6-B 区 形になる貝が多い 混土貝層で貝はしっかりしている 黒褐色土が少量混入している



# 第2面

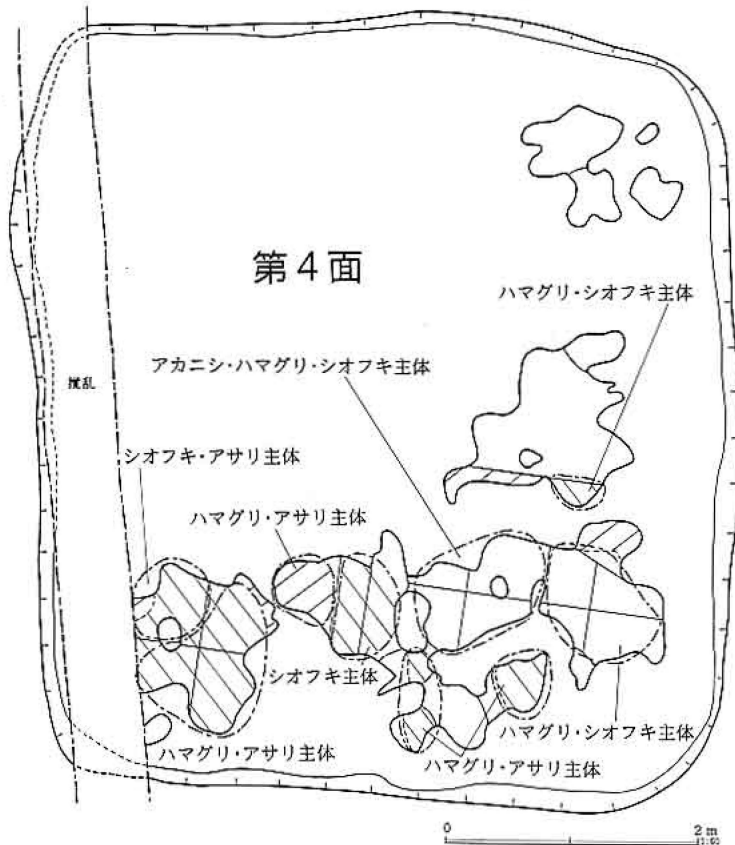
- 1-A・B 区 破碎した貝が多い 混貝土層で  
黒褐色土中に破碎した貝が混入している
- 2-A 区 混貝土層で破碎した貝が多い
- 2-B・D 区 破碎した貝が多い 形の残る貝が少ない  
混貝土層で黒褐色土の混入が多い
- 2-G・J 区 形になる貝が多い 混土貝層で2-A・D区と  
比べ黒褐色土の混入が少ない
- 3-A 区 混土貝層で形になる貝が多い
- 3-B・D 区 やや破碎した貝が多い 混貝土層で  
黒褐色土中に破碎した貝が目立つ
- 3-C 区 貝の量は少ない
- 4-A 区 混土貝層で形になる貝が多い
- 5-A・D 区 各区ごとに貝種の相違はあまりみられない  
アサリ以外の貝種ではハマグリが  
多い傾向がある
- 6-A・B 区 破碎した貝が多い 混貝土層で  
黒褐色土中に破碎した貝が混入している

第7図 第1号住居跡貝層調査所見(1)



### 第3面

- 1-A 区 混土貝層で形になる貝が多い
- 1-B 区 混土貝層で貝は殆どなくなる
- 1-D 区 混土貝層で第2面より貝の量が減る
- 2-A 区 貝の量が減る  
混土貝層で黒褐色土の混入が多い
- 2-B~E 区 第2面同様破砕した貝が多い カガミガイの含有が2-G~J区に比べ少ない  
混土貝層で黒褐色土の混入が多い
- 2-G~J 区 形になる貝が多い  
2-B~E区の様相と若干異なる  
シオフキ・カガミガイが特に多い
- 3-A・B・D 区 混土貝層で破砕した貝が多い
- 3-C 区 破砕した貝が多い
- 4-A・C 区 形になる貝が多い
- 5-A 区 破砕した貝が目立つ  
ブロック中心部に貝が多い傾向がある  
アサリ主体であるがカガミガイが他区と比べ多く入るハイガイも目立つ
- 5-B~D 区 破砕した貝が目立つ  
ブロック中心部に貝が多い傾向がある

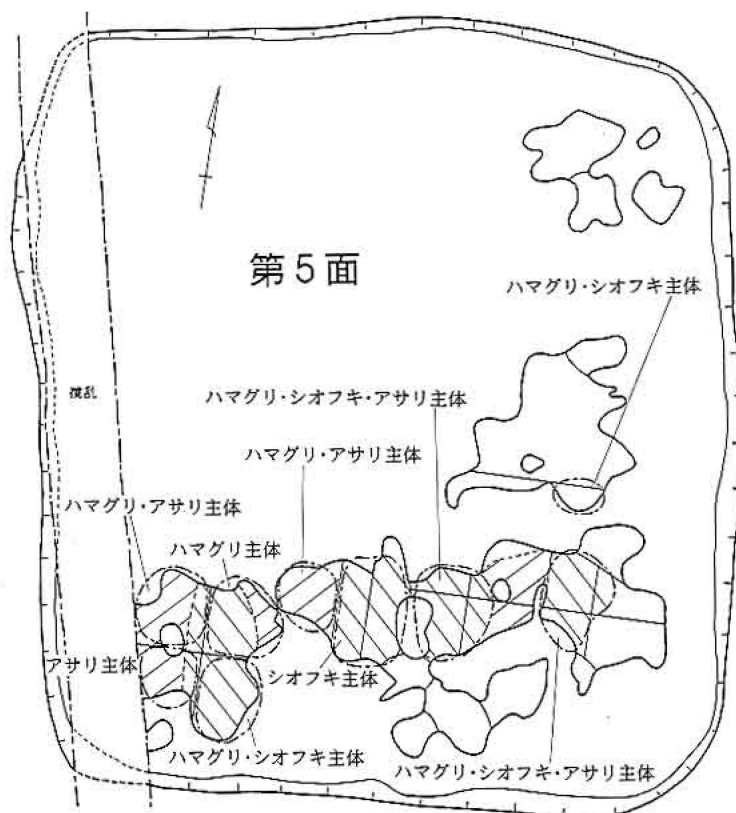


### 第4面

- 1-A 区 貝は殆どみられなくなる
- 1-C 区 貝の量は減る
- 1-D 区 貝は依然として多く入る 形になる貝が多い 混土貝層であるが上面で取り上げた以上に黒褐色土の混入が目立つ
- 2-A 区 貝の量は減る 形になる貝が少ない  
貝層範囲は狭まる
- 2-B~E 区 第3面より形になる貝が増える  
混土貝層でアカニシの含有が2-G~J区に比べ少ない 貝層範囲は狭まる
- 2-G~J 区 形になる貝が多い 混土貝層でカガミガイは第3面より減る傾向がある
- 3-A 区 破砕した貝が多い 貝の量も多い
- 3-C・D 区 破砕した貝が多い 全体的に貝の量は減る
- 4-A・C 区 形になる貝が多い 貝の量も多い
- 4-B 区 破砕した貝が多い 貝の量は少ない
- 5-A~D 区 混土貝層で形になる貝が多い

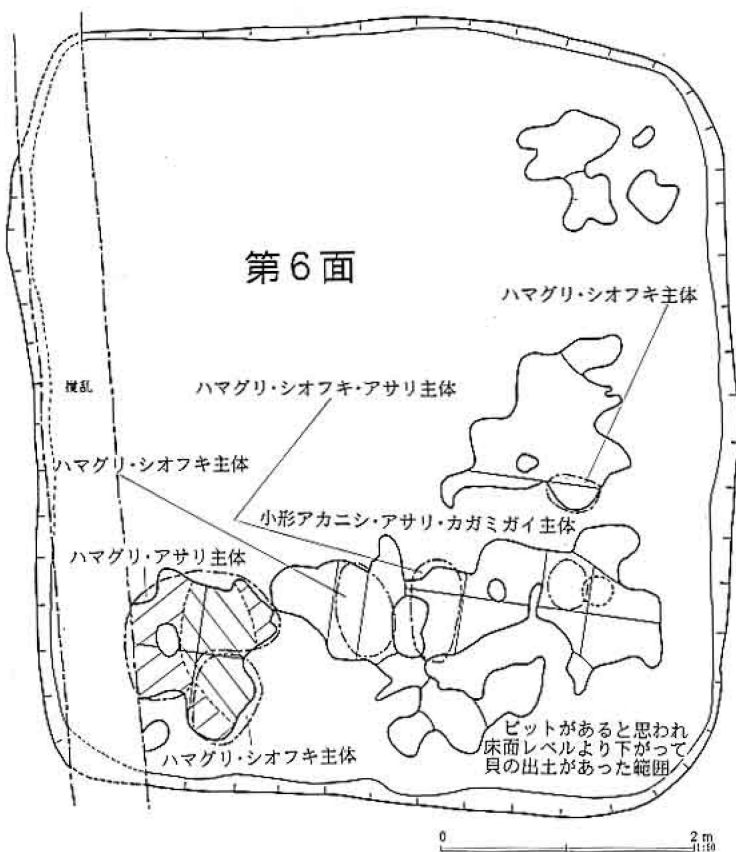
第8図 第1号住居跡貝層調査所見(2)





#### 第5面

- 1-D 区 混貝土層で破碎した貝が多い
- 2-B・D・E 区 混貝土層で形になる貝が多い  
しかし若干貝が混じるが殆ど黒褐色土が主体の混貝土層の部分もある
- 2-G~J 区 形になる貝が多い カガミガイもやや目立つ しかし若干貝が混じるが殆ど黒褐色土が主体の混貝土層の部分もある
- 4-A・C 区 形になる貝が多い 混貝土層で貝の量も多い 4-A 区にはハマグリも目立つ
- 4-B 区 形になる貝が多い  
混貝土層で貝の量は少ない
- 5-A~D 区 混貝土層で形になる貝が多い  
貝層範囲は狭まる



#### 第6面

- 1-D 区 貝は滅り非常に稀薄になる  
混貝土層で黒褐色土中に若干の破碎した貝を含有している
- 2-B・D 区 貝の量は減る 形になる貝が多い  
貝層範囲はさらに狭まる  
混貝土層で黒褐色土の含有が増す
- 2-I・J 区 貝の量は第5面と比べ差はない 2-B・D 区の量が減るのとは若干様相が異なる  
同区のものに比べ大きいアカニシの混入が目立つ 貝層範囲はさらに狭まる
- 4-A・C 区 上面は破碎した貝が目立つが一枚下げると形になる貝が目立ってくる 混貝土層で貝の量は減る 貝層範囲も狭まる
- 5-A~D 区 形になる貝が多い 貝の量は全体的に減る  
貝層範囲はさらに狭まる

第9図 第1号住居跡貝層調査所見 (3)



#### 第7面

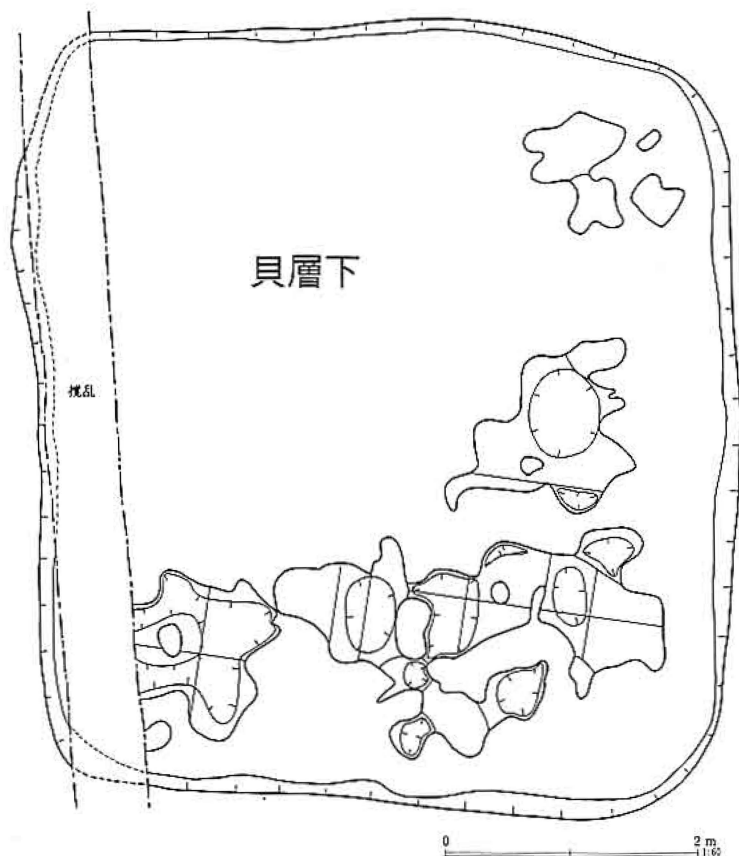
4-A・C区 混貝土層で形になる貝が多い

貝の量はさらに減る

5-A～D区 混貝土層で中心部には形になる貝が多い

貝の量はかなり減る

黒褐色土の含有が多い



#### 貝層下

1-A区 中央部が窪む

混貝土層で若干の破碎した貝が混入する

1-C区 貝は殆どなくなる

混貝土層で若干の破碎した貝が混入する

1-D区 第6面の貝層範囲下は窪む

貝ブロック 2 貝層下の土は黒褐色土でしまりが弱く粘性がある

第6面の貝層範囲下は窪む

貝ブロック 4 貝層下の土は黒褐色土でしまりが弱い

6-A・B区 貝層下の土は黒褐色土でしまりが弱い

A・B両区とも中心部がやや窪む

第10図 第1号住居跡貝層調査所見(4)

第1表 出土貝類統計表(1)

第1号住居跡(1)

ブロック	区	面	ウミニナ	イボニシ	アカニシ	アラムシロ	サルボウ	ハイガイ	ナミマガシワ	イタボガキ	マガキ	ハマグリ	オキシジミ	カガミガイ	アサリ	シオフキ	マテガイ	オオノガイ	ヤマトシジミ	マイマイ類	小マイマイ類	キセルガイ類	不明	合計	
1	A	① ② ③ ④ 具下	2  4	2  2 1	4 3 12  2	19 6 15 1	6 3 3 1	86 99 87 3		10 18 38 3	282 244 574 20	18 5 29	3 1 4 1	326 242 492 17	192 145 509 16	10 3 3		1		16 11 27 2	8 2 15			985 782 1818 67 0	
	B	① ② ③ ④ 具下				2 1 1		3 3 1		36 39 8 2			12 9 3	21 22 2					4 6	1  1			79 85 17 2 0		
	C	② ③ ④ 具下		1	1 3 3	6  1	1  1	9  7		4  18 26	19 1 5	4 1 5	1  1	43 65 44	15 15 20	2			4 6	2 2			110 113 106 0		
	D	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ 具下	1  2   1		4 2 2 2			1 1 1 1 1	6 24 19 14 5 1	3 14 6  1	17 48 50 74 73 58 6	1  1 2 6 3		19 83 67 110 50 54 4	9 37 44 58 78 47 10	3  5 2 1 1				4 8 6	7 9			55 220 208 269 236 168 20	
1ブロック計			10	6	34	2	56	19	367	1	100	1594	75	21	1640	1240	28	1	4	3	92	47		5340	
2	A	① ② ③ ④ 具下					1 2 1		1				85 161 82 47 26		1 1 33 12 10	10 58 46 23 13		1		9 1				133 291 166 82 53	
	B	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ 具下	1 2 2  1		1  3 1 8 12	13 5 2 2 3 1	1 1 1 1		1 1 1 1		152 149 88 93 105 30 3	1  1 2 1		20 9 6 8 25 8 9	142 157 61 53 100 35 32 9	29 90 52 62 100 32	1  1 1 1		15 5 6 1	3 2 2  5			378 424 225 223 347 120 13		
	C	① ② ③ ④ 具下	1 3  4		8 12 4	1  1 1 1			1 1 1 1		60 145 143 87 7	1  3 2 1		3 32 36 16 2	111 171 202 100 22 8	37 102 87 37 8	1 2 2 1  1			7 6 2 1	7 9 2  1			240 492 496 263 42	
	D	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ 具下	1  2 2 2 1		2 1 3 8 3 2	4 3 4 9 1 1	1  2 1 1		1 1 1 3 4 1 1		93 52 74 76 25 16 1		1 1 3 4 1 1	10 25 15 18 7 6 10	60 89 110 96 68 22 3	58 86 110 94 62 17 3	1  2  1 1			16 7 4 12 1	3 5  5			250 269 325 325 180 67 15	
	E	③ ④ ⑤ 具下	1  15 6		4 15 6	2 4 3		1			19 29 11			8 8 3	23 85 33	13 32 13		3 3		3 4 2	1			74 181 72 0	
	F	④ ⑤ 具下						1	1		7 4			11 5 2	10 1									29 11 2	
	G	② ③ ④ ⑤ 具下	1  2  1		10 12 5 2	1 4 1 1 1		1  1		1  1	33 30 15 8 5		11 11 4 1 10	35 53 37 20 14	58 51 31 17 14					3 1 7	2 8			156 162 110 49 32	
	H	② ③ ④ ⑤ 具下			2 4 1 1	2 3  2 1			1 1		10 22 96 11 2		3 7 1 5 2	29 87 29 66 9	21 58 53 35 4		1  2			2 5 4 1				69 191 186 129 18	
	I	② ③ ④ ⑤ ⑥ 具下			4 4 5		3 1 1 1		1 2 1		65 18 121 69			27 5 15 8	24 66 139 23	34 39 89 32		1  1			3 7 7 5				0 155 145 394 143

第2表 出土貝類統計表(2)

第1号住居跡(2)

ブロック	区	面	ウミニナ	イボニシ	アカニシ	アラムシロ	サルボウ	ハイガイ	ナミマガシワ	イタボガキ	マガキ	ハマグリ	オキシジミ	カガミガイ	アサリ	シオフキ	マテガイ	オオノガイ	ヤマトシジミ	マイマイ類	小マイマイ類	キセルガイ類	不明	合計	
2	J	②		3		4	1					80		13	32	35				14	7			189	
		③		5		2						55	1	8	67	73				15	2			228	
		④		4		1						32		7	65	47				6	7			169	
		⑤		2		1						31		8	46	23					5				116
		⑥	1	3								42		7	73	31				5	2			164	
貝下																								0	
貝ブロック2計			27	161	1	123	22	12		28	2615	12	412	2813	2046	16	1	16		186	102			8593	
3	A	②		4		6						50		1	70	11								142	
		③		3		2						26	3	1	27	6	1							69	
		④	5	1		4						32			110	14			1					167	
		⑤																		1				2	
		貝下																							2
	B	①	1	4		6						32			86	17	1	1		1		1			149
		②	1	8	1	9						43			132	28	3		1		2	1			229
		③		1		2	1					14		2	84	19			1		2				126
		④										3			36	11									50
		貝下																							
	C	②				3						34		5	14	13					1				70
		③		1		4						24		1	48	14				1		3			96
		④										17		3	21	4				1					46
		⑤				1						2			8	4				1					15
		貝下																							
	D	①				2				1		25			37	16									80
②											2			4	2									9	
③		1	2		4	1					11			37	21	1		1		4	1			84	
④					1	1					3			20	4					1				30	
貝下														5										5	
貝ブロック3計			8	24	1	44	3	1		318	3	13	739	184	6	7			12	6				1369	
4	A	①				2	1			1	154	1	12	139	56					3	4			373	
		②	1	2		6		1		1	151		1	137	66	1				13	3			383	
		③	1	3		4	2	2		1	254		5	162	175					32	3			645	
		④				3		1		1	288		2	104	104				1	8	2			520	
		⑤		4							193		4	106	139	3		1		13	3	2		468	
		⑥		1							27			13	10						1				52
		⑦	1	1							150	1	2	68	99	1				3		2		328	
		⑧																							1
		貝下									6				1										7
	B	④		4		1					32		3	22	21			1		4				88	
		⑤				2	2				23	1	2	64	24					15	1	1		135	
		貝下		1		1					42		2	19	24										89
	C	①			1	3	1				105			148	56	2									316
		②				4					133				73	67	1				5				283
		③				6					166			13	93	114			2		12	3			412
		④	1	4		4					184		4	114	123		1			9	2				447
⑤			3		3					270		8	127	223										635	
⑥			13		4					207		2	94	96	1		1		18	16				452	
⑦			3		4					89	1		39	45					4	1				186	
貝下				1					25		6	7	11										50		
貝ブロック4計			5	47	1	48	6	4		4	2499	4	66	1529	1454	10		10		139	39	5		5870	
5	A	①				15						1			3	1								20	
		②		1		6						21		7	91	34								160	
		③		6		12						72		9	269	90					13	4			475
		④		3		6						76	1	2	218	63					4	1			374
		⑤		1		2						80			248	55	1		2		6	2			398
		⑥	1	4		1						54		1	238	59	1		2		4	3			368
		⑦	5			1						11			70	11	1		1						100
		貝下													1	1									2
	B	①		1		4						9		4	46	10	1								75
		②		9		4						62		3	288	40	2		1		12	5			426
		③	1	5		9						158		2	529	80	1		2			2			789
		④				1						40			124	49									214
		⑤	3	2		5		1		1		87		1	549	110	1		2		6	2			770
		⑥				1	1			1		19			330	47	1								400
		⑦							1			2			16	3									22
		貝下													1										1
	C	②		1		2						22		19	100	36					2	2			184
		③		2		2						60		6	189	72					7	2			340
		④		3		1						63		5	235	75	1		1		4	5			393
		⑤		2		6						36		2	217	44			2		8	3			320
		⑥	2	2		3	1					47		1	180	36	1		2		2	3			280
⑦			5		1	2	8		1		28		1	79	25			1		5	1			157	
貝下			1								6			31	4	1								43	

第3表 出土貝類統計表(3)

第1号住居跡(3)

ブロック	区	面	ウミニナ	イボニシ	アカニシ	アラムシロ	サルボウ	ハイガイ	ナミマガシワ	イタボガキ	マガキ	ハマグリ	オキシジミ	カガミガイ	アサリ	シオフキ	マテガイ	オオノガイ	ヤマトシジミ	マイマイ類	小マイマイ類	キセルガイ類	不明	合計
5	D	①			2		5					41		2	130	20			1	6	3	1	211	
		②			8		10					86			231	50		2				388		
		③	1		2		4	1				61		1	252	74		2	2	4		404		
		④	5				2					19			300	44		2				373		
		⑤	1				3					10		1	271	30	2	2		1		319		
		⑥					1					4			25	4		1			4		38	
		⑦																					0	
貝下			1				1							12	1							15		
貝ブロック5計			20	60		108	4	11		3	1175	1	67	5273	1168	14		24		86	42	3	8059	
6	A	①				5	1	9				78		12	244	51				8			408	
		②		1		3		3				59		6	176	38	2			10	4		302	
	貝下																					0		
	B	①						2				18		8	62	9	1			3	2		105	
②			2			1		2			12		4	52	4	1			3	2		83		
③																						0		
貝下																						0		
貝ブロック6計				3		9	1	16			167		30	534	102	4			24	8		898		
7		①										8		2	9	2							21	
貝下								1		1	3				5	1							11	
貝ブロック7計								1		1	11		2	14	3								32	
8		①										1				1				2	1		5	
貝下																							0	
貝ブロック8計												1				1				2	1		5	
9		①				2						12			111	22				4	1		152	
貝下																							0	
貝ブロック9計						2					12				111	22				4	1		152	
不明・その他			5	12		8	2	9		2	180	2	15	562	143	5		2		30	12		989	
合計			75	6	341	5	398	57	420	2	138	8572	97	626	13215	6363	83	2	63	3	575	258	8	31307

第3号住居跡

貝ブロック1	1						1		4		6	11			83	18				1				125
貝ブロック2	1						9				1	22			51	24			1		2	1		112
貝ブロック3	1		2				1		1		1	35			81	25								147
貝ベルト1	3										2				10	3								18
貝ベルト2												38			131					8				177
貝ベルト3												2			5					2	1			10
不明・その他							6	2	1		3	67	1	1	58	63				1	2			205
合計	6		2				17	2	6		13	175	1	1	419	133			1	14	4			794

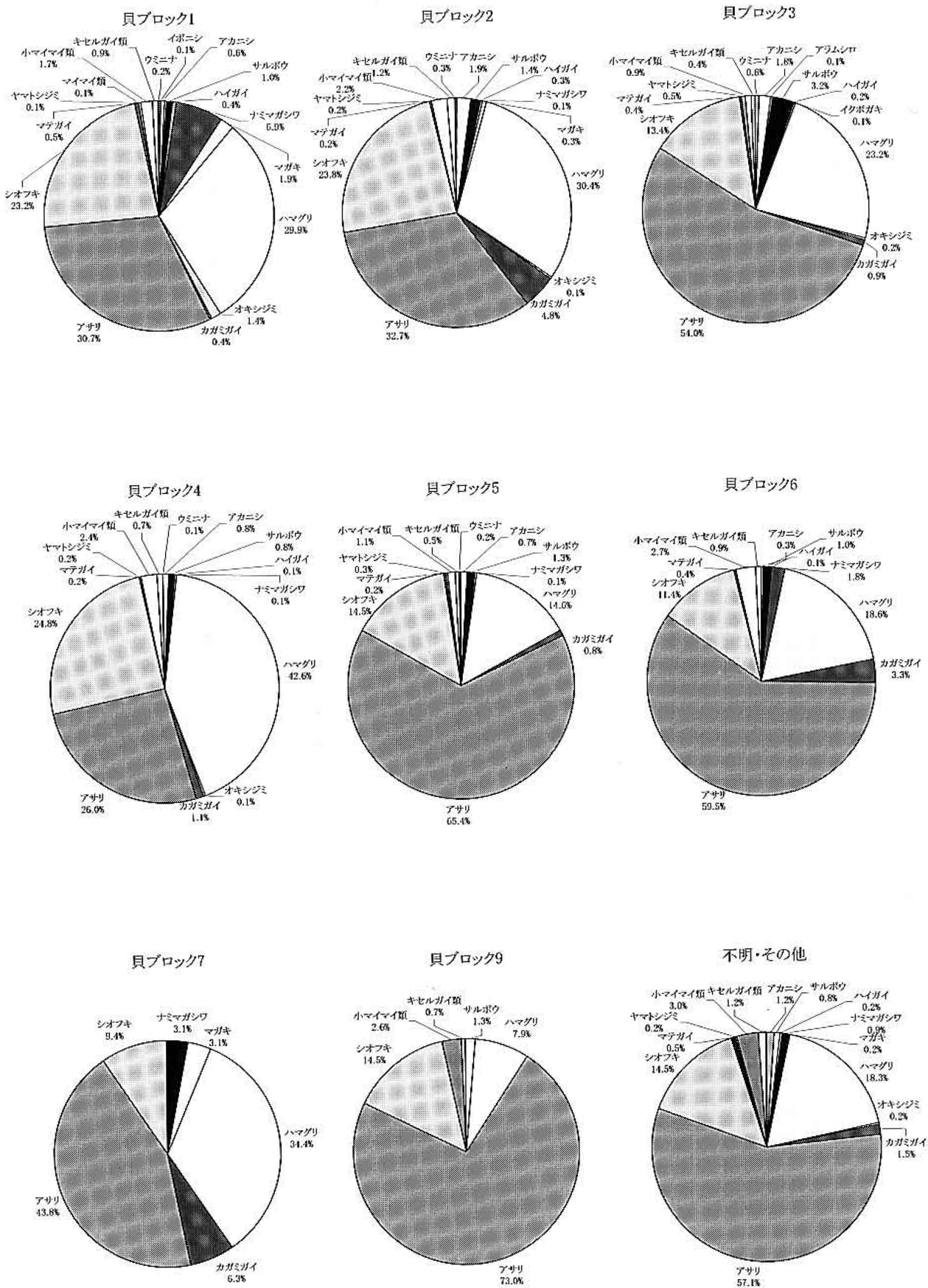
第69号土壇

貝ブロック1																									4
貝ブロック2																									0
貝ブロック3上	1											15		29		2									47
貝ブロック3中							1	1				4	13	1	42	1	83	1	1		5	1			154
貝ブロック3下												1			11	3									15
貝ブロック4上					1		1					5	57		175	8	1	1			2	4			255
貝ブロック4中	3			1			1	2	1			30	42	2	373	16	17	2			8	2			500
貝ブロック4下	10							1				10	77	2	646	22	2	1			15	5			791
南北ベルト上					4		1	1				24	50	1	45	8	12	2	2	2	2	4			156
南北ベルト中	5				4			3	1			97	156	1	680	39	236	14			25	27	2		1290
南北ベルト下	3							1				14	66		302	16	20	2			71	46	1		542
西側ベルト上												1	10		69	2									82
西側ベルト中												2	71		53	4	2				3				135
西側ベルト下	1					1						1	1	1	77	2		2			6	3			95
東側ベルト																					6				6
不明・その他															4		1				3				8
合計	23			10	1		4	9	2			189	558	8	2509	121	375	26	3		137	102	3		4080

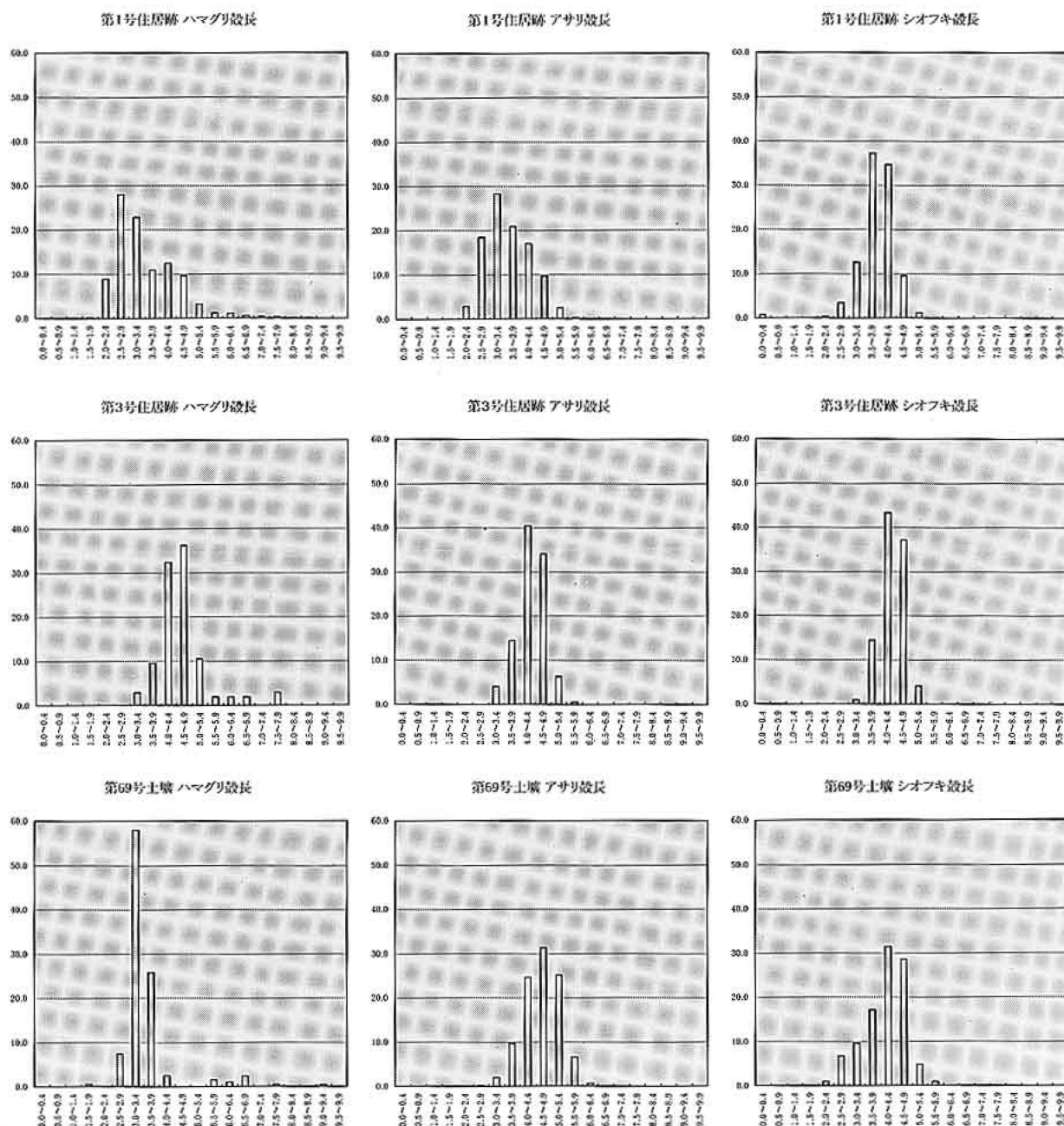
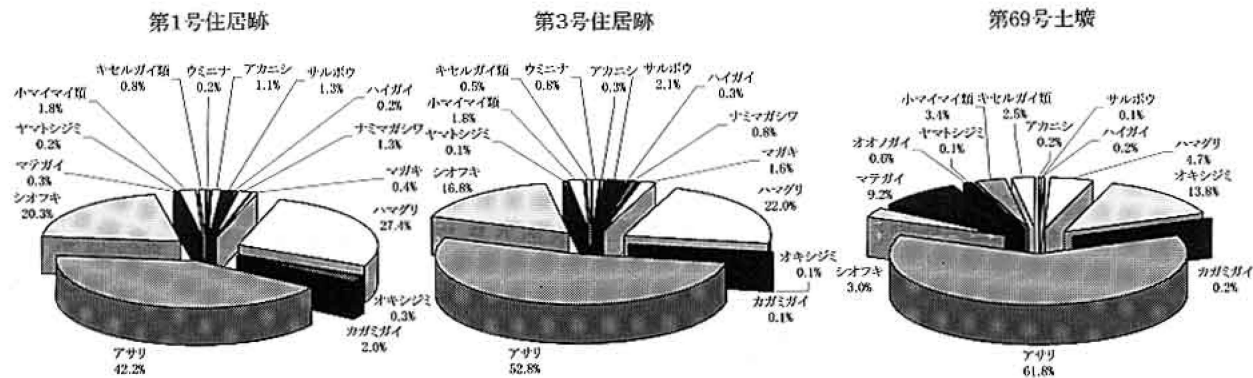
貝類出土比(%)

第1号住居跡	貝ブロック1	0.2	0.1	0.6	0.0	1.1	0.4	6.9	0.0	1.9	29.9	1.4	0.4	30.8	23.3	0.5	0.0	0.1	0.1	1.7	0.9				100.0
	貝ブロック2	0.3		1.9	0.0	1.4	0.3	0.1		0.3	30.5	0.1	4.8	32.8	23.9	0.2	0.0	0.2		2.2	1.2				100.0
	貝ブロック3	0.6		1.8	0.1	3.2	0.2		0.1		23.4	0.2	1.0	54.3	13.5	0.4		0.5		0.9	0.4				100.0
	貝ブロック4	0.1		0.8	0.0	0.8	0.1	0.1		0.1	42.6	0.1	1.1	26.1	24.8	0.2		0.2		2.4	0.7	0.1			100.0
	貝ブロック5	0.2		0.7		1.3	0.0	0.1		0.0	14.6	0.0	0.8	65.6	14.5	0.2		0.3		1.1	0.5	0.0			100.0
	貝ブロック6			0.3		1.0	0.1	1.8			18.6		3.3	59.5	11.4	0.4				2.7	0.9				100.0
	貝ブロック7							3.1		3.1	34.4		6.3	43.8	9.4										100.0
	貝ブロック8										20.0				20.0					40.0	20.0				100.0
	貝ブロック9					1.3					7.9			73.0	14.5					2.6	0.7				100.0
	不明・その他	0.5			1.2	0.8	0.2	0.9		0.2	18.3	0.2	1.5	57.1	14.5	0.5		0.2		3.0	1.2				100.0
第1号住居跡計		0.2	0.0	1.1	0.0	1.3	0.2	1.4	0.0	0.4	27.7	0.3	2.0	42.0	20.5	0.3	0.0	0.2	0.0	1.8	0.8	0.0			100.0
第3号住居跡		0.8		0.3		2.2	0.3	0.8		1.6	22.2	0.1	0.1	53.2	16.9			0.1		1.8	0.5				100.0
第69号土壇		0.6		0.2	0.0	0.1	0.2	0.0			4.7	13.8	0.2	61.8	3.0	9.2	0.6	0.1		3.4	2.5	0.1			100.0





第11図 第1号住居跡出土貝類構成種



第12図 貝類出土遺構の構成種と主要貝の殻長

一方、第1号住居跡から出土した遺物は、第13～15図に示した。土器は、撚糸文系1点、羽状縄文系901点、浮島・興津系433点、阿玉台系3点、堀之内系1点の計1,339点であった。浮島・興津系の出土量が多いが、もちろん住居構築期の羽状縄文系、黒浜式土器が破片も大きく、住居の北西と南方で器形の推し量れる大破片が2個体分出土した。

4は撚糸文系の胴部片で、今回の調査では遺構外の1点との2点のみが出土した。RL縄文が施された胴部破片である。

1～3・5～69が住居跡構築期にあたる黒浜式土器で、5～10が口縁部文様帯を設定する個体である。帯内の構成は、コンパス文(6・7)、平行線文(5・8～10)があるが、いずれも爪形による描出手法が併用されている。

11～32は工具による文様が器面の全体に及ぶもので、11の横位施文線の重層文、12～18の杵状文とその親縁型は縄文と併用されている。19～21は葉脈状文で、基本は半截竹管による施文のはずだが、22は撚糸文で葉脈部を表現している。一部単沈線を含む23～32は、格子目をはじめ、区画を伴わない沈線構図が描かれるものだが、28は荒い肋骨文を構成しているようにも見える。

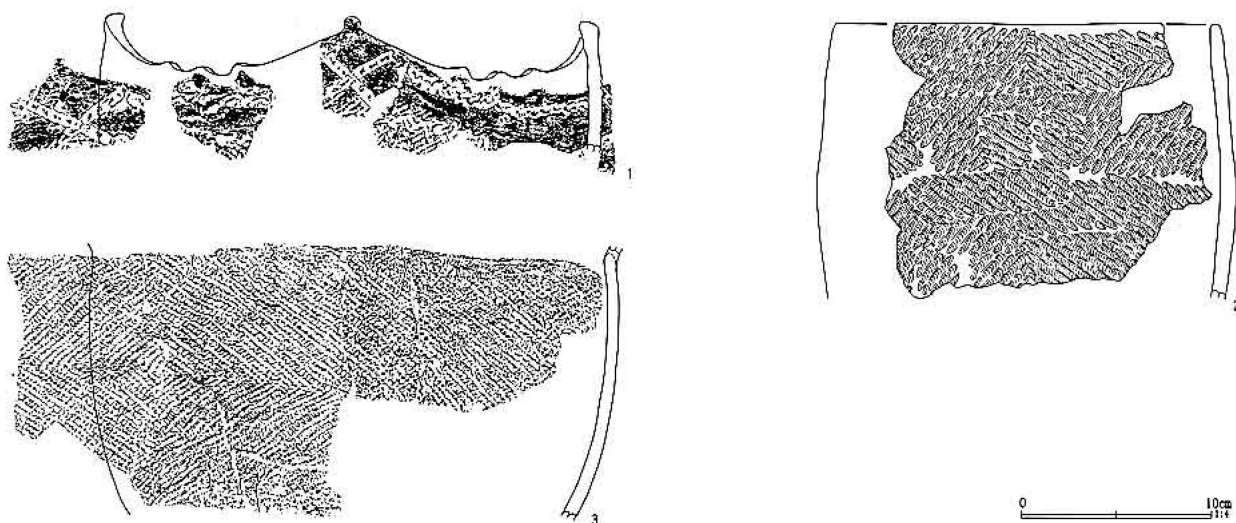
縄文のみが観察できるものは33～69に示した。

他の羽状縄文系と比べ、単節斜縄文の比率が少なく、無節斜縄文と附加条・撚糸文を加えた三者がほぼ拮抗している。無節斜縄文(33～43)の原体は粗めの繊維束を持ち寄ったせいか、単節と見紛うものも多い。図示したもののなかではLが優勢だが、これが一般相になるかは判断できない。

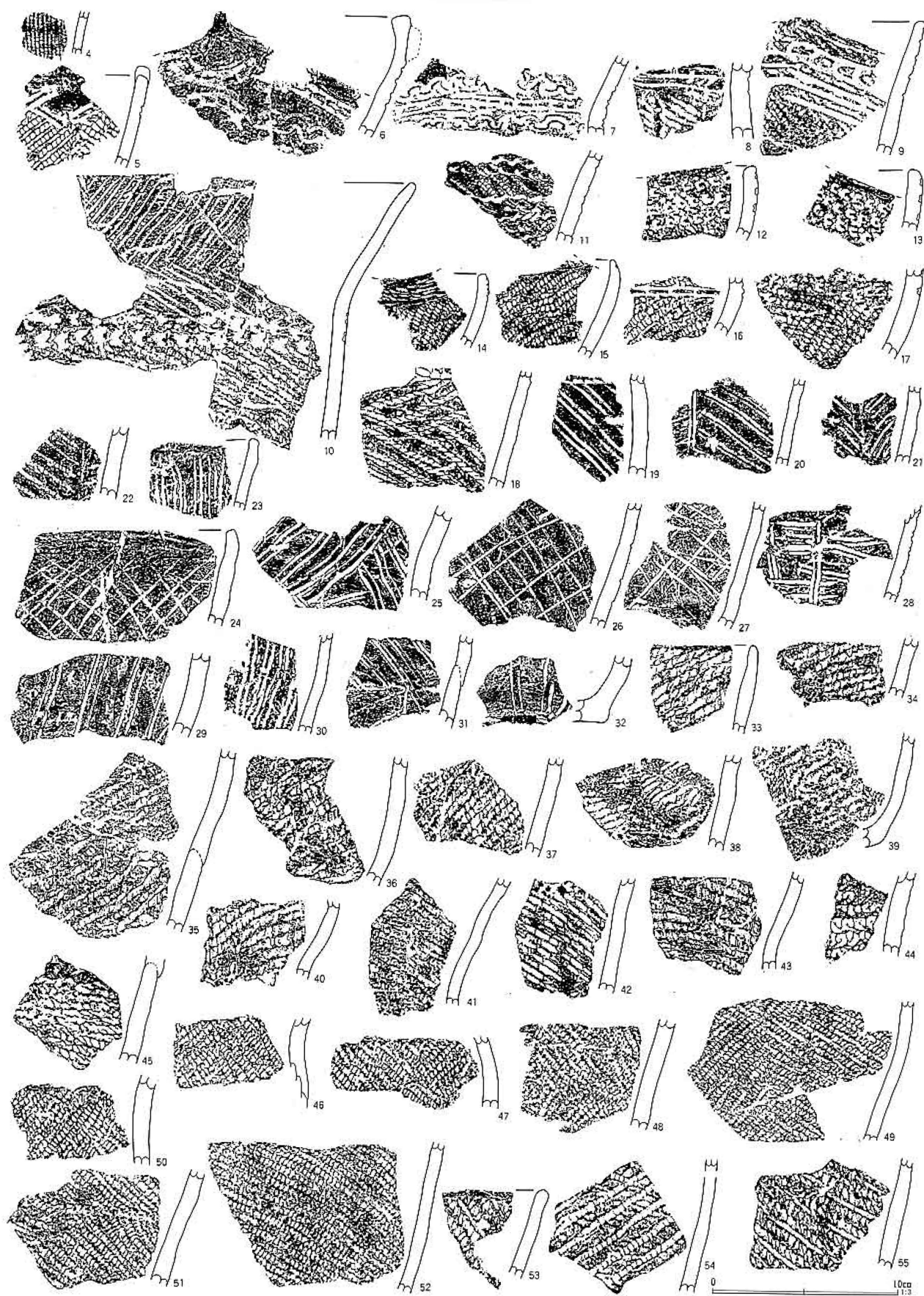
44～52に示した単節斜縄文のうち、44は多段のループ文が施文されており、環が小さいことから、黒浜式にままだと認められるのではなく、関山式期の所産と考えられる。また、45は直前段反撚の単節縄文が施文原体となっている。

これに対し、附加条縄文と撚糸文が施文されたものは、用意した軸と縄を絡げる方向、縄軸や絡縄の種類でさまざまな変化がある。両者の識別は縄軸の圧痕の有無によって判断したが、53～66が附加条縄文、67～69が撚糸文と見なせ、前者が優勢となる。附加条法は、順方向に絡げるものが多いが、54のように逆も存在する。また、撚糸文はすべて1段の縄を絡げている。

70～97は、竪穴埋没の最終やその後などに本住居跡上に混入したと考えられる前期後半の土器で、70はヘラ切りを加えた沈線で渦巻き構図を描く西関東・中部系前期末葉の所産である。その他は浮島・興津系の土器だが、口縁下に鋸歯文を基調とする特

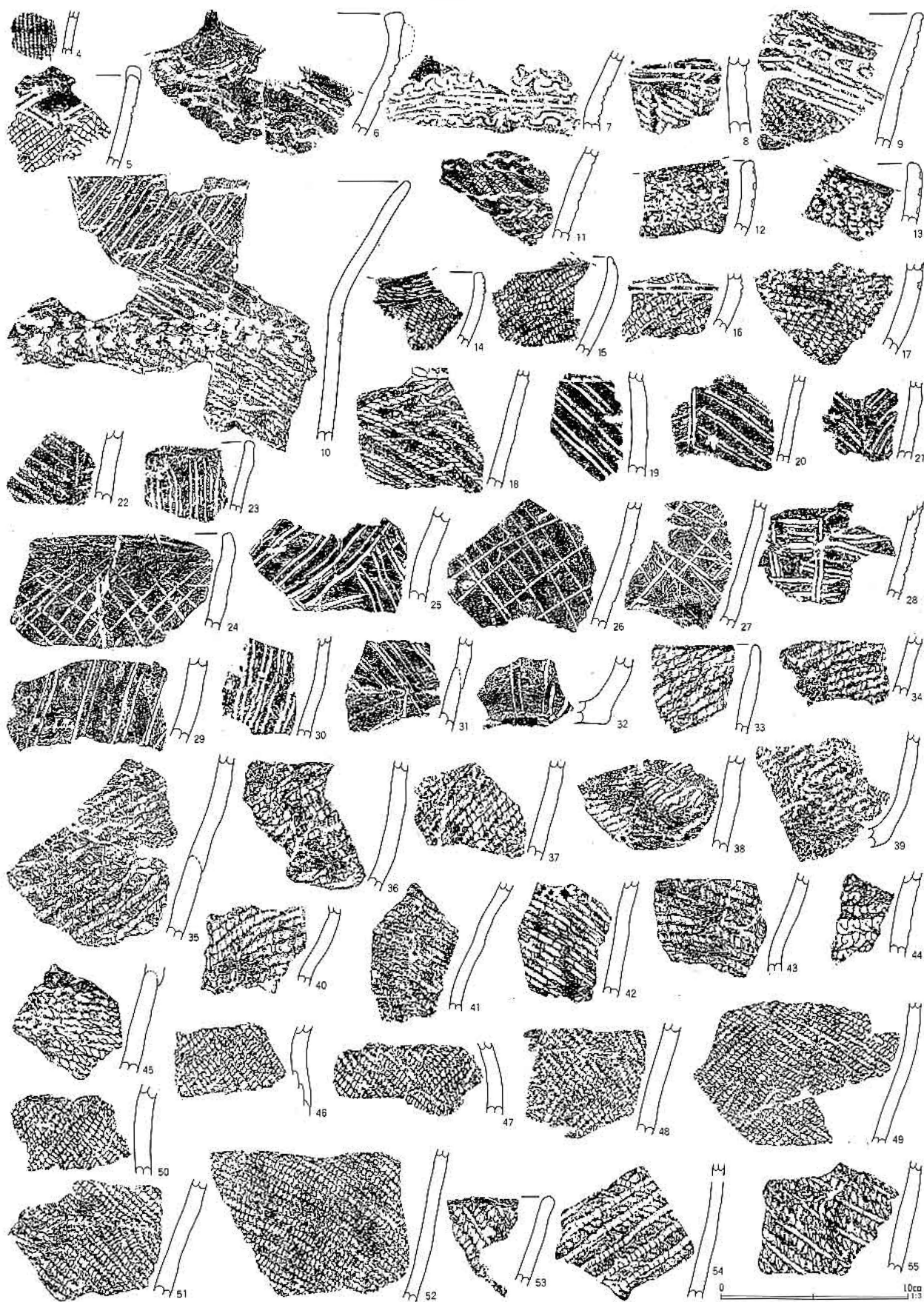


第13図 第1号住居跡出土遺物(1)



第14図 第1号住居跡出土遺物(2)





第15图 第1号住居跡出土遺物(3)



別の文様帯を設定する型の個体は出土していない。

71・72は貝殻文と沈線が併用されるもので、後者は楕円構図の口縁文様帯かも知れない。73～84は、支点移動による貝殻文が主に施文されるもので、肋脈のある貝殻原体を押圧的に支点移動するもの（73～75）、引きずるように行うもの（76～79）、肋なし原体を使うもの（80～83）、いわゆる三角文を施文するもの（84）などに分けられる。

85～90は貝殻以外の工具線文が施されるもので、85～87は半截竹管、もしくは先の尖った棒状工具の単施文で、88～90は篋状工具の小口を加工した集合沈線で波状線や弧線など、とらえどころのない構図を描いている。

91～95は縄文が施文され、96・97は、破片内では無文のものである。前者のうち91・92は無節、93～95は単節が原体となるが、すべて1段時Lの縄を用いている。また、97は複合口縁下にも文様がないことから、全面無文の土器と考えられる。

98は、今調査でただ1点発見された堀之内系の土器で、渦巻文と、主構図をつなぐような斜方向の区画が認められる。堀之内Ⅱ式に相当しよう。

一方、石器類は、石鏃が1点、磨製石斧が1点、磨石類が3点、石皿片が6点、黒曜石剥片が4点、チャート剥片が1点の総16点が出土した。

第15図99は基部に緩い抉りを造り出すチャート製の石鏃で、100は着柄のソケット部にあたる基部を欠く緑色岩製の磨製石斧である。刃部脇の側縁のすばまり方からして再生を繰り返したとも思えず、使用後程なく破損し、放棄されたものととれる。

また、101～103の磨石類3点は、閃緑岩、安山岩、砂岩と、みな異なる起源の原材を用いているが、すべてが腹部に複数の凹痕が連続し、101の側面には軽い敲打痕が全周し、103の基端部には強い加撃による複数の衝撃剥離が残る。さらに、103の破損面はその後砥石的な用途で利用されたようで、滑らかに整っている。これが破損後に行われたことは腹部の凹痕との関係で判断できる。

## 第2号・第4号住居跡、第69号土壇（第12・16～28図、第3表）

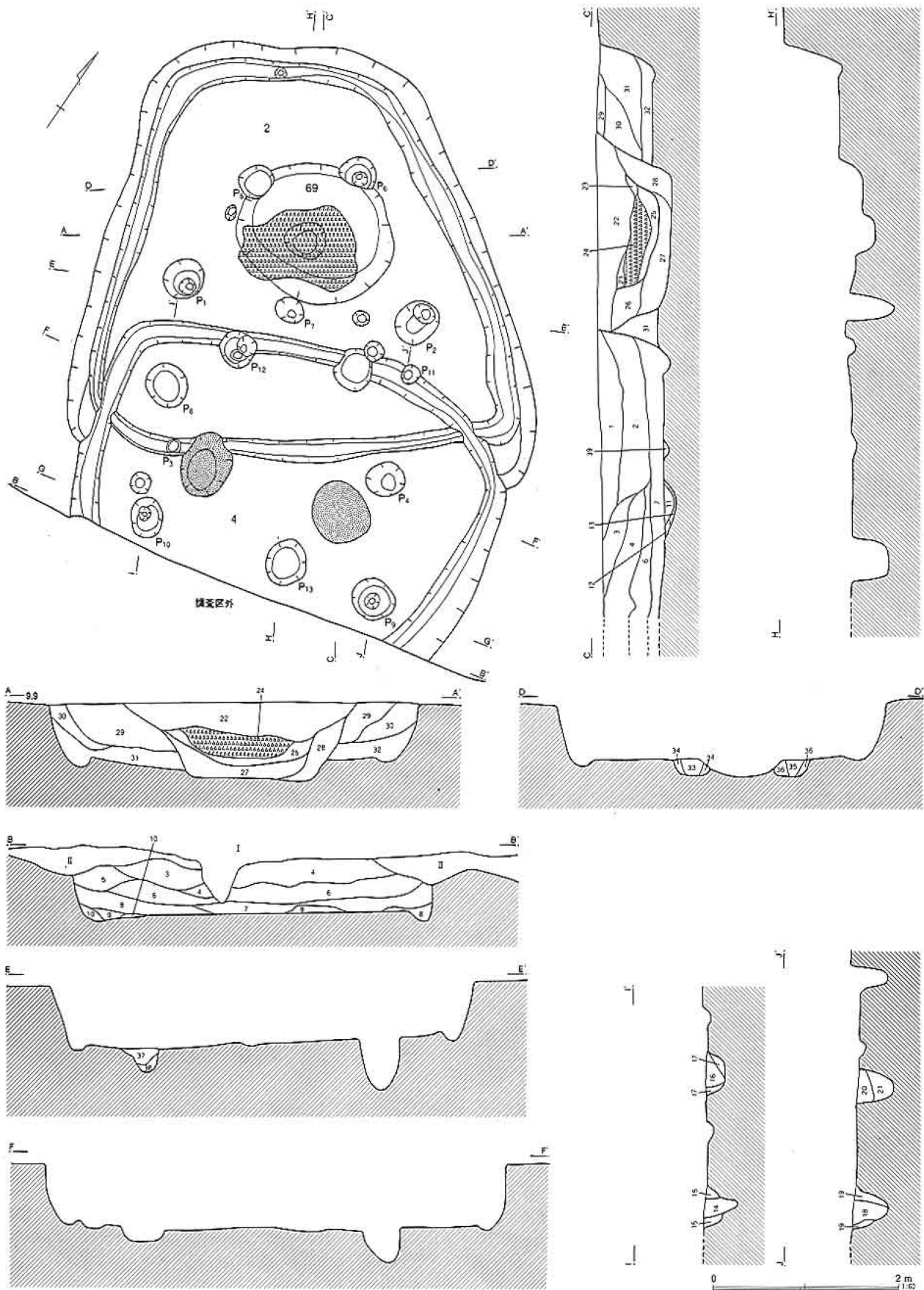
調査区の南端のD・E－7・8グリッドにまたがって発見した。住居跡2軒と土壇1基の重複である。確認当初は3基の遺構を一つの住居跡と判断し、精査を開始したものの、堅穴の深い掘込みと断面観察位置の幸運にも恵まれ、3基の遺構の形態や重複関係を遺漏なく把握できたと考えている。

このうち第2号住居跡は、台形の深い堅穴を掘り、壁溝を全周させる。第4号は、一部の調査がかなわなかったものの、全周する気配の壁溝と深さに共通する堅穴の掘込みから、第2号と同形態の堅穴が軸方向を逆にして重複したものと考えられる。

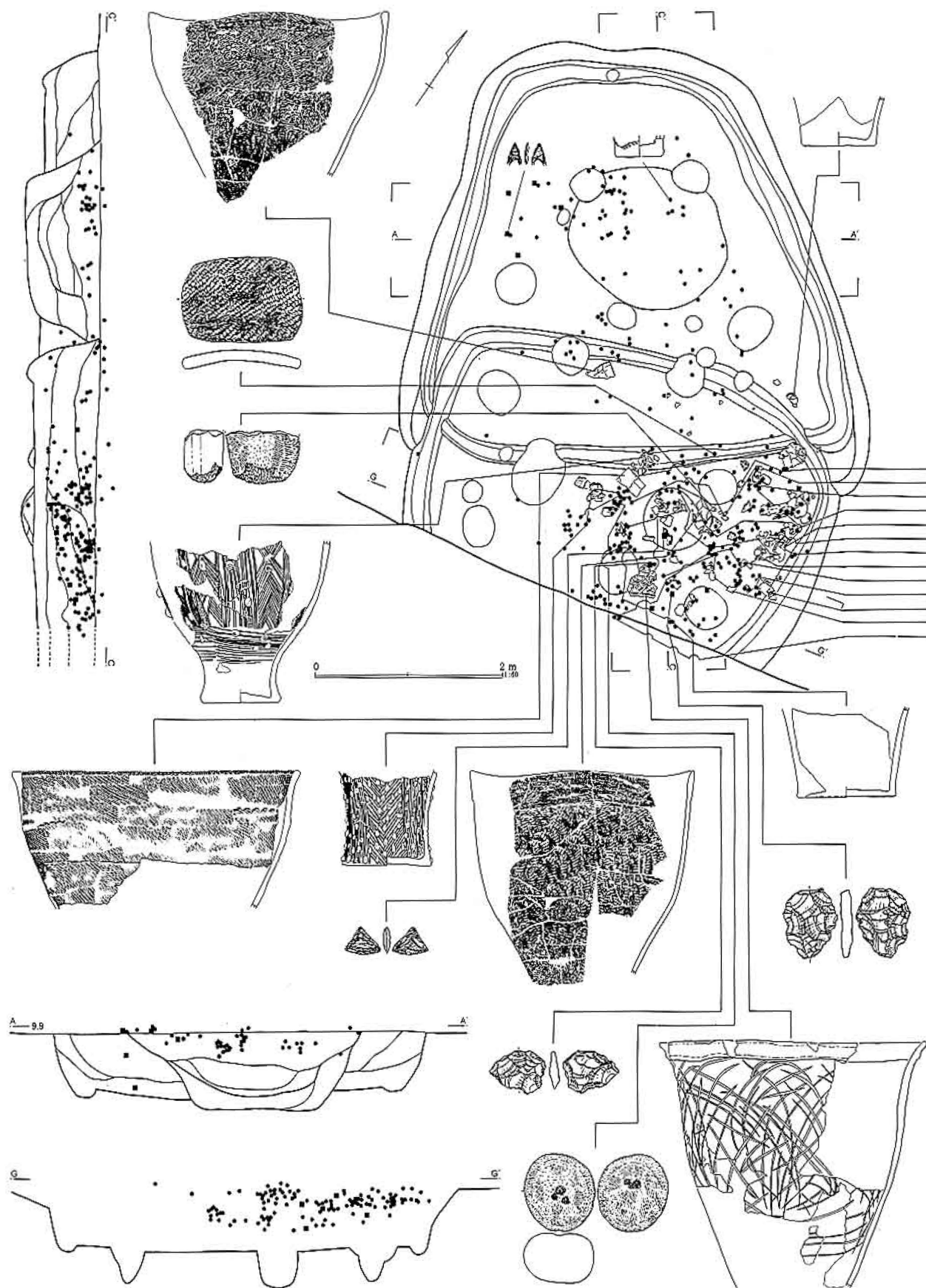
両住居跡では、合わせて13本の主要な小穴を発見した。このなかで、第2号におけるP1・2、第4号に属するP9・10が、主軸線長を等分するような中央位置で線対称の配置となるため、それぞれの支柱であったと考えられる。このほか、第2号では、第69号土壇に破壊されているP5・6が同様な線対称関係にあり、しかも台形の掘込みと呼応するようにその間隔を狭めている。具体的な架構は想定できないが、上屋掛けにあたっての補助的な役割を担っていたと想定できる。

さらに、第4号との重複部分の壁際にあたるP3・4も一定の深度を備えており、補助柱として機能していたと思われる。この想定は、P11・12を第4号の同様な施設と認定することで補強が可能で、これにより、両住居跡は規模・形態・掘込み・壁際施設・支柱配置が全く同じ確立した堅穴の類型であることが判明する。

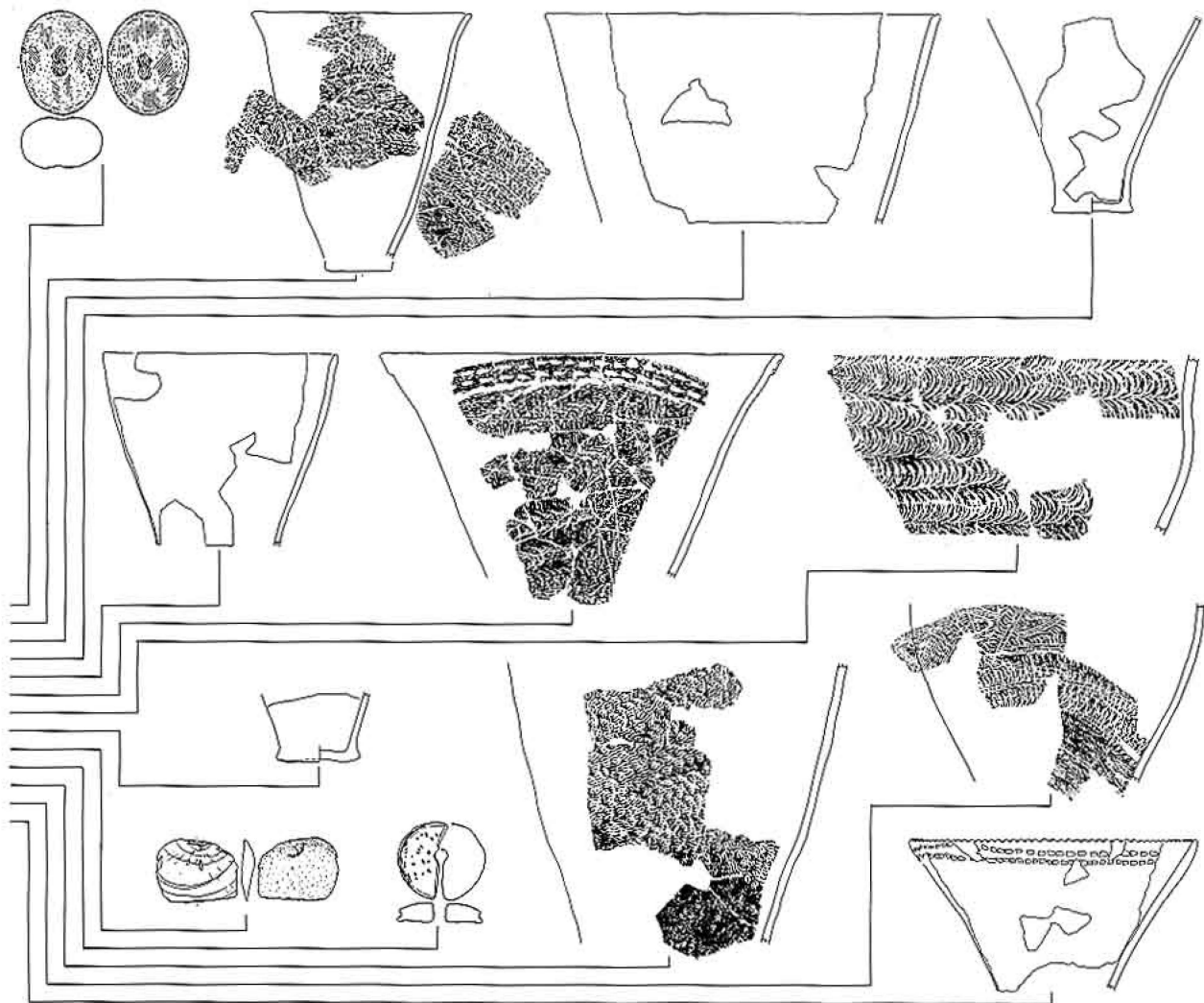
もう一つ、第2号のP7、第4号のP13は、支柱間に配されている上に、これらもまた一定の掘削深度をもっている。この共通も偶然とはいいがたく、用途は不明のままだが、類型の一つに含まれるだろう。また、炉跡は、第4号の北東で地床炉を検出したが、第2号では確認できなかった。堅穴の中央で重複する第69号土壇に破壊されたと考えられるが、



第16图 第2号·第4号住居跡、第69号土壤



第17図 第2号・第4号住居跡、第69号土壙遺物出土状況(1)



第18図 第2号・第4号住居跡、第69号土壌遺物出土状況（2）

想定位置が第4号と矛盾する。

両者の基本的な覆土は、一部でロームブロックを含む黒褐色から暗褐色系の土がもっぱらで、同一層では壁際が高くなる順当な自然堆積層である。だが、第4号の最終埋土である第1・2層は、ひときわ堆積が遅れており、埋没途上の掘り返しかとも考えたが、確定はできなかった。

また、土色や含有粒子、堆積土の締まり具合では視認できなかったが、第17図断面Gに見るように、同号では第7層以下で遺物がほとんど出土せず、後述する浮島・興津系や竹管文系など大量の投棄土器類が出土した第6層以上の各層とは明確な一線がひける。先の第1・2層が第7層と接するものの、そ

の上限に影響を与えていないことも、下層と中・上層とを弁別する一つの証左となるだろう。

土層の堆積状況から見た重複する2軒の住居跡の先後は歴然としており、第4号が第2号、さらには第2号を破壊する第69号土壌に対しても後出することが現地で観察できた。また、後二者の間の先後も同様に判定は容易であった。

その第69号土壌は、第2号住居跡がほぼ埋没しつつあるときに構築されている。下層形態はややいびつな円形、上層形態も土層断面から見る限りは同様であったと考えられる。埋没途上の住居跡を目安とするかのように構築されるやや大型の土壌は、前期後半の遺構調査の際にままた遭遇する典型的なもの



だが、多くが壁面を貫くように設けられているのに対し、こちらはほぼ中央が選択されている。また、墳底の中央にはさらなる小穴が掘られるが、こちらも本土墳に付属するものと判断した。

覆土の基調は、重複する住居跡と大差ない自然堆積土であるが、埋没途上に全量 46,132 g の貝類が投棄されていた。黒浜式期のそれと同じく、投棄は埋土を一部掘削し、窪地を作り上げてから行われている。第 25 層までがこれにあたるが、他と同じく、有機質の浸透による土壌の後変質が生じていた。

出土した貝の種類は、第 1 号住居跡の各ブロック、それらを平均化した全量、さらには第 3 号住居跡の構成などとはまったく異なったものであった（第 3 表・第 12 図）。アサリのみが突出がめだち、黒浜式期に盛んに採取されたハマグリとシオフキは他の貝種に及ばないことすらある。ナミマガシワやマガキなども影をひそめ、かわって、オキシジミとマテガイがハマグリ・シオフキに勝る比率を占める。また、率こそ少ないが、黒浜式期にほとんど見かけることのなかったオオノガイが安定して認められた。

一方、人工遺物は、第 4 号住居跡で大量の投棄土器を検出した。分布は東壁下から中央にかけての中・上層で、第 17 図などに示した大型片は、中央でやや低く、そして壁際の土層の上昇と歩調を合わせるように分布していた。全形を知り得るものはなく、前述のように、下層にはほとんど及ばないことから、比較的短い期間での不要物の投棄と見なせる。

また、同一個体の破片がいくつも出土するものの、形にならない第 23 図 42～45 などは、複数の遺構の最上層や、その確認時、さらには掘込み範囲の外からも発見されており、明らかに出土状況図の各土器より上層に位置していた。埋没の最終にわずかな窪地をたよりに大破片が投棄され、その後の長い埋没過程で散乱が助長されたと想定できる。

これに対し、第 69 号土壇では貝類投棄前の遺物混入はほとんどなく、投棄後の破片流入がもっぱらであった。また、第 2 号住居跡では、破片が散漫に

出土したにすぎない。

三遺構の出土土器は、いずれも浮島・興津系が主体となり、竹管文系がこれに伴出した。歴然とした土層断面の違いとはうらはらに、各遺構の様相に大きな先後の差は認められない。

ちなみに、第 2 号住居跡と第 69 号土壇は、整理作業までの既刊（末次 2002）では黒浜式期の造営と報告したが、以上のような住居形態と、後述する出土遺物の比率や遺存度からして、第 4 号住居跡と同じく、興津式期に構築されたものと訂正したい。

第 2 号住居跡出土遺物（第 19 図 2～第 20 図 56・第 23 図 17）

第 2 号住居跡と、重複する第 69 号土壇出土品とは現地では個々に識別することができず、整理時に測量図との対照でそれぞれを分離した。だが、出土地の測量を行わなかった小片など、特定が不可能であったものはすべて本住居跡に帰属させている。両者の混乱も多少想定した上で参照いただきたい。

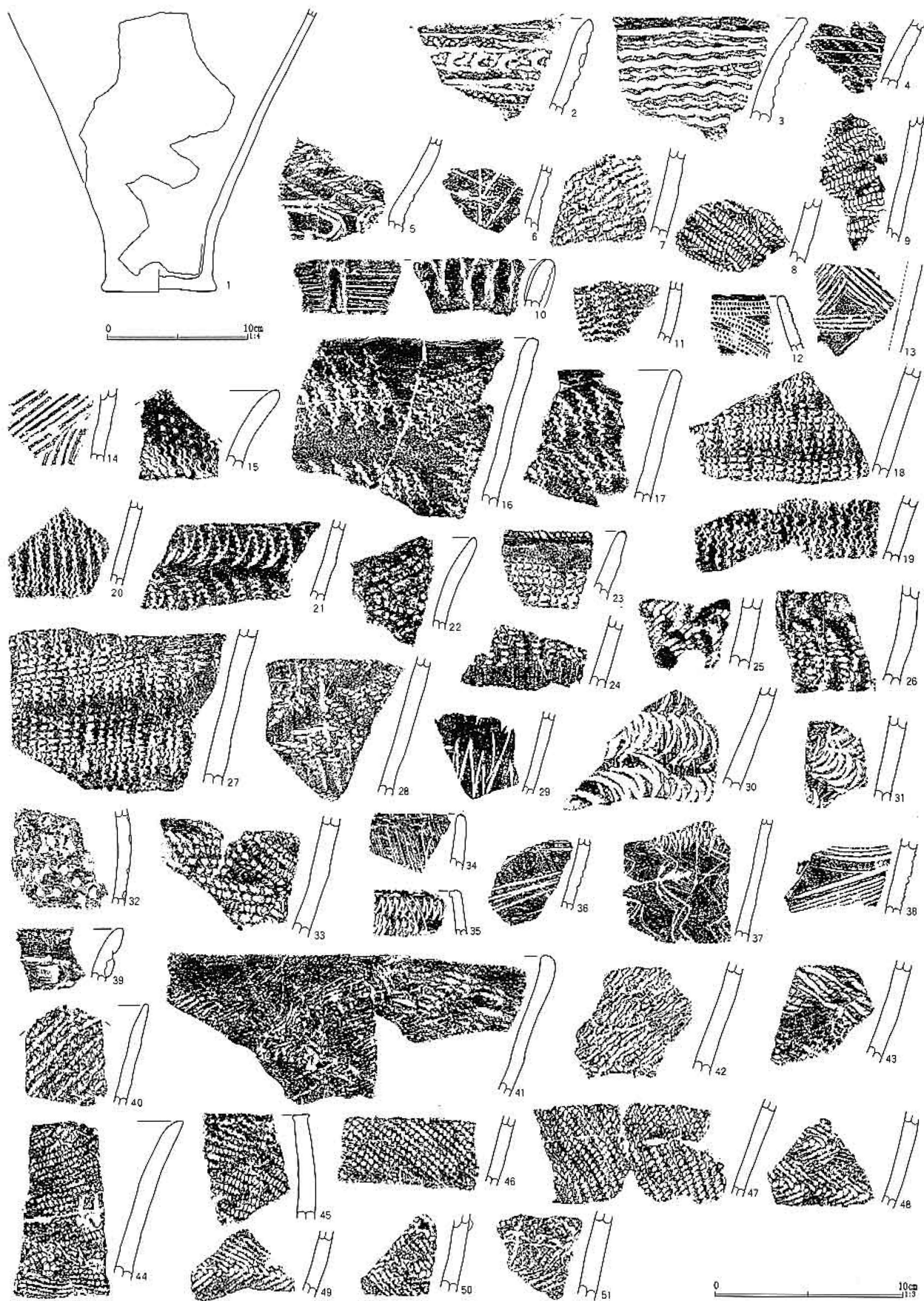
また、前述したとおり、堅穴の最終堆積層に紛れた土器の中には、例えば第 19 図 38 と第 26 図 174・177 のように、第 2 号と第 4 号の両住居跡にまたがって分布していた個体もある。だが、同個体が歴然としていても接合がかなわない限り、それぞれの出土地ごとに紹介している。

さらに、整理時の不行き届きから、第 19 図 1 と第 23 図 17 は出土地を取り違えてしまっているが、入稿までに修正がかなわなかった。両者を差し替えて読み進めていただきたい。

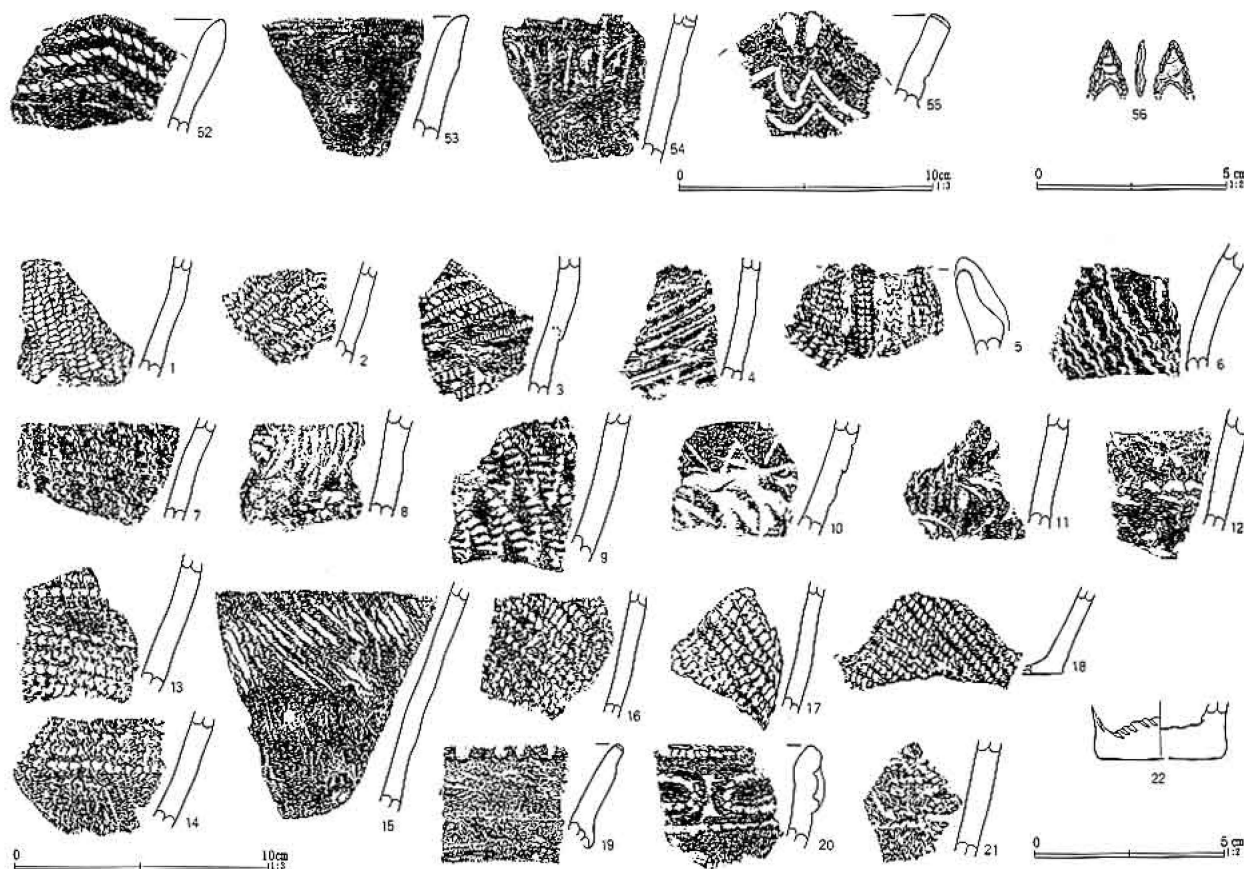
第 2 号住居跡からの出土と判定した土器は、羽状縄文系 73 点、竹管文系および浮島・興津系 448 点、阿玉台系 3 点の計 524 点である。その出土比とともに、各破片の遺存度からしても、浮島・興津系が主体期であることに疑いはないだろう。

第 19 図 2～9 は、埋土に混入したと考えられる黒浜式土器で、2 は幅狭の口縁部文様帯を設定し、3・4 は全面に横位線文が展開する構成が想定できる。





第19图 第2号住居跡出土遺物



第20図 第2号住居跡・第69号土壇出土遺物

また、5は杵状文の中位区画で、6は単沈線による葉脈状文である。縄文を施した3点は、7が無節、8・9が附加条縄文を施文している。

前期後半のものは10～54・第23図17が相当するが、10～14が西関東・中部系の土器である。集合沈線を地文として棒状の貼付文を多用する10は諸磯c式、押し引き爪形文で渦巻を基調とする構図を描く12と、彫りの深い平行沈線で横帯幾何学文を描く13・14は十三菩提式に相当するだろう。また、第23図42などと同一個体で、トロフィー形の器形をもち、キャタピラ文で双渦巻を成する11は、その移行期にあたるものだろう。

これに対し、15以下の浮島・興津系のうち、主に支点移動を繰り返す貝殻文を施文するのが15～31である。肋脈のある施文具を押圧気味にしてこれを行うもの(15～21)、その際にやや施文具を引きずるもの(22～28)、肋脈のない貝殻を施文

具とするもの(29～31)の三種があるのは他と共通しているが、施文具を引きずる度合いが少ないのがおおよその傾向となるだろうか。

また、32は施文具不明の三角文が連続し、33はいわゆる変形爪形文の一種と思えるが、よくわからない。後者は破片内で菱形を描くようだが、横区画線を伴う口縁下の文様帯となるかは判断できない。

沈線で文様が描かれるものには34～38がある。35は貝殻文地に平行沈線を加えるものだが、沈線区画内充填の貝殻文とは異なり、構図的には34などと共通する。そして、37も貝殻文と沈線が併用されるが、こちらは大木5式的な蛇行文を垂下させている。

縄文を施文するものは四種が出土した。40～43は無節斜縄文が施文されるが、やや附加条気味の0段2条原体を使用している。ところが、単節斜縄文は節が揃うしっかりとした原体を用いている。また、

48～50は第一種結束による横位羽状縄文が、51は末端の結節部痕が意図的に施文されている。さらに、52は丸形の波状縁に沿うように3条の撚糸側面圧痕が印されている。

無文土器は53・54と第23図17を掲載したが、54は破片の上端にわずかな刺突列の痕跡も確認できる。同じように、17の底部は器高が足らず、有文土器の下位である可能性も否定できない。

この他、55の阿玉台系土器を示したが、同番は波頂部に2条の押圧を施し、口縁形態に沿った平行線のみをめぐらす。沈線は、透かしてみるほどの押引きで施文されている。

一方、第2号住居跡から出土した石器類は、石鏃1点、黒曜石剥片3点、チャート剥片3点の計7点であった。図示したのは56の石鏃のみで、脚部を欠いたやや挟りの強い小型鏃である。

#### 第69号土壇出土遺物（第20図1～22）

第69号土壇出土として分離した土器は羽状縄文系16点、竹管文系および浮島・興津系94点の計110点である。前期後半土器の出土量は、第2号住居跡を破壊し、かつ第4号住居跡に破壊されるという土層観察結果とも矛盾しない。

土壇の構築期に先立つと考えられる黒浜式の1～4は、いずれも縄文施文の土器である。1・2は単節斜縄文、3は附加条縄文、4は同方向撚りの縄を2本を絡げた撚糸文である。

前期後半のものは5～19で、5は第2号住居跡11、第4号住居跡42～45、遺構外121～125と、また、13・14は第2号住居跡33と同個体である。ロッキングを繰り返す貝殻文のみの破片は6～11が相当し、押圧的（6・7）、引きずり気味（8・9）、肋なし貝の施文（10・11）の3者がある。また、12は貝殻文のようだが、詳しい施文法がわからなかった。

さらに、20・21は単線の押引き文で幅狭の文様帯を描く阿玉台系土器である。この他、22の貝殻文がわずかに残るミニチュア土器が出土している。

第4号住居跡出土遺物（第19図1・第21図1～第23図16・18～第28図249）

今調査で最も多くの遺物が出土した第4号住居跡では、1,756点の土器を発見した。その内訳は、羽状縄文系114点、竹管文系および浮島・興津系1,649点、阿玉台系12点、安行系1点である。

器形のわかるものは、みな同じような層から出土しており、浮島・興津系の同時存在相や東西関東の共伴事例としても良好な資料といえるだろう。当然ながら、本書への掲載量も多くなったため、遺構外で扱った土器分類の各群類ごとに説明を加える。詳しい分類基準は遺構外の項を参照いただきたい。

#### 第Ⅱ群土器（19～32）

堅穴埋没時に混入した黒浜式土器のうち、19～25が工具文様で構成される土器である。19は口縁部文様帯に菱形文を描くもので、20・21は横位の工具文が連続するものである。横位線と波状文が秩序だって配置されている。この種の構成は口縁部文様帯にとどまるものと、全面に及ぶものがあるが、後者は厳正な交互配置がほとんどないことから、これらは文様帯を設定するものと考えられる。また、22は縄文地に複数の爪形線が見られることから、杵状文の、そして、23・24は整然とした平行沈線と縦位線から葉脈状文の仲間となるだろう。

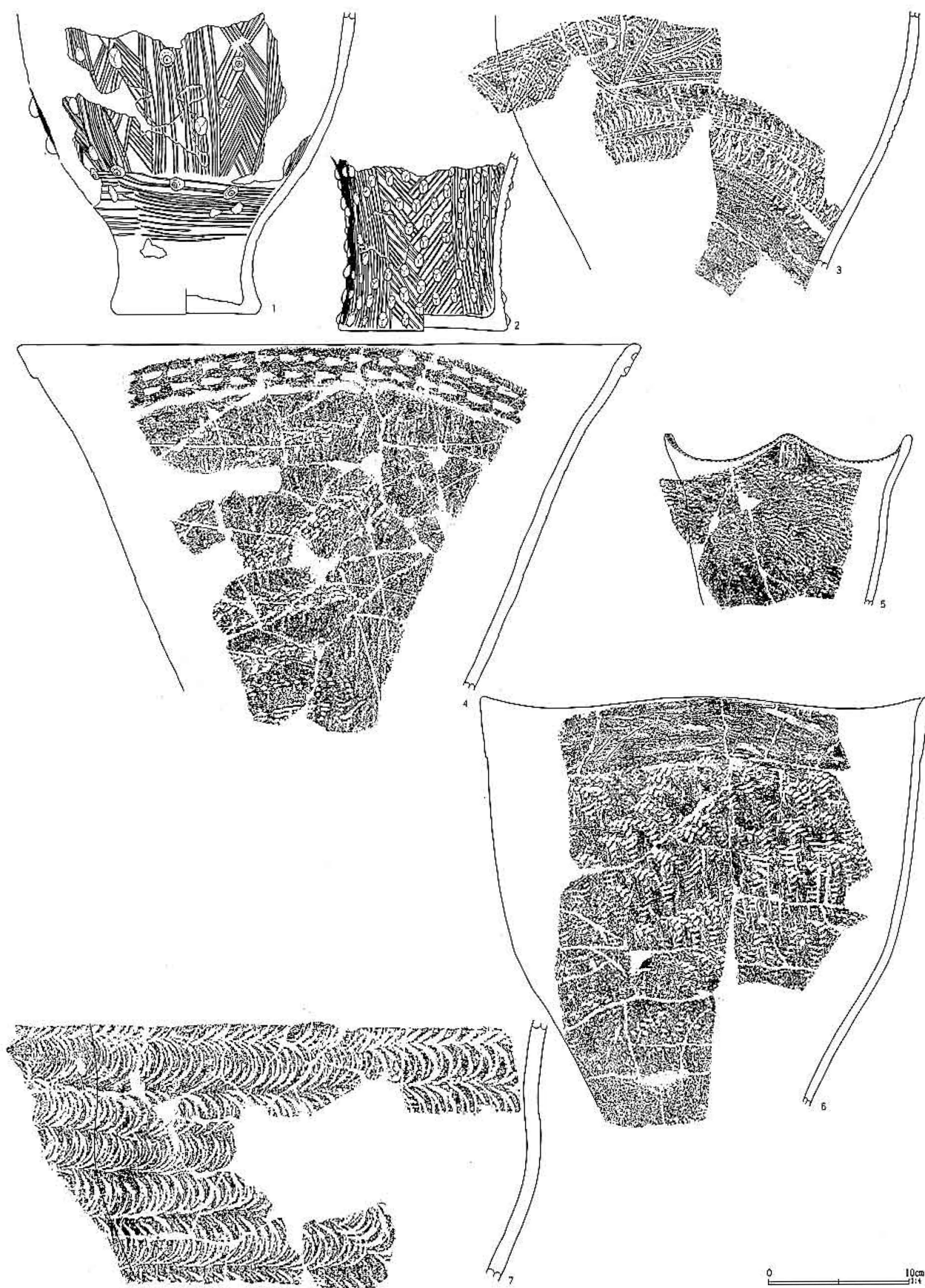
これに対し、縄文のみを施すものには、無節斜縄文（26）、単節斜縄文（27）、附加条縄文（28）、撚糸文（29～32）がある。

#### 第Ⅲ群土器（1・2・33～56）

前期後半の西関東・中部に隆盛した系譜の土器で、ここでは諸磯c式・十三菩提式がもっぱらである。沈線を施文するものの一部では、東関東系の第Ⅳ群と見紛うものもあるが、地域色がはっきりしている類型の胎土を抛り所に両群を分離した。

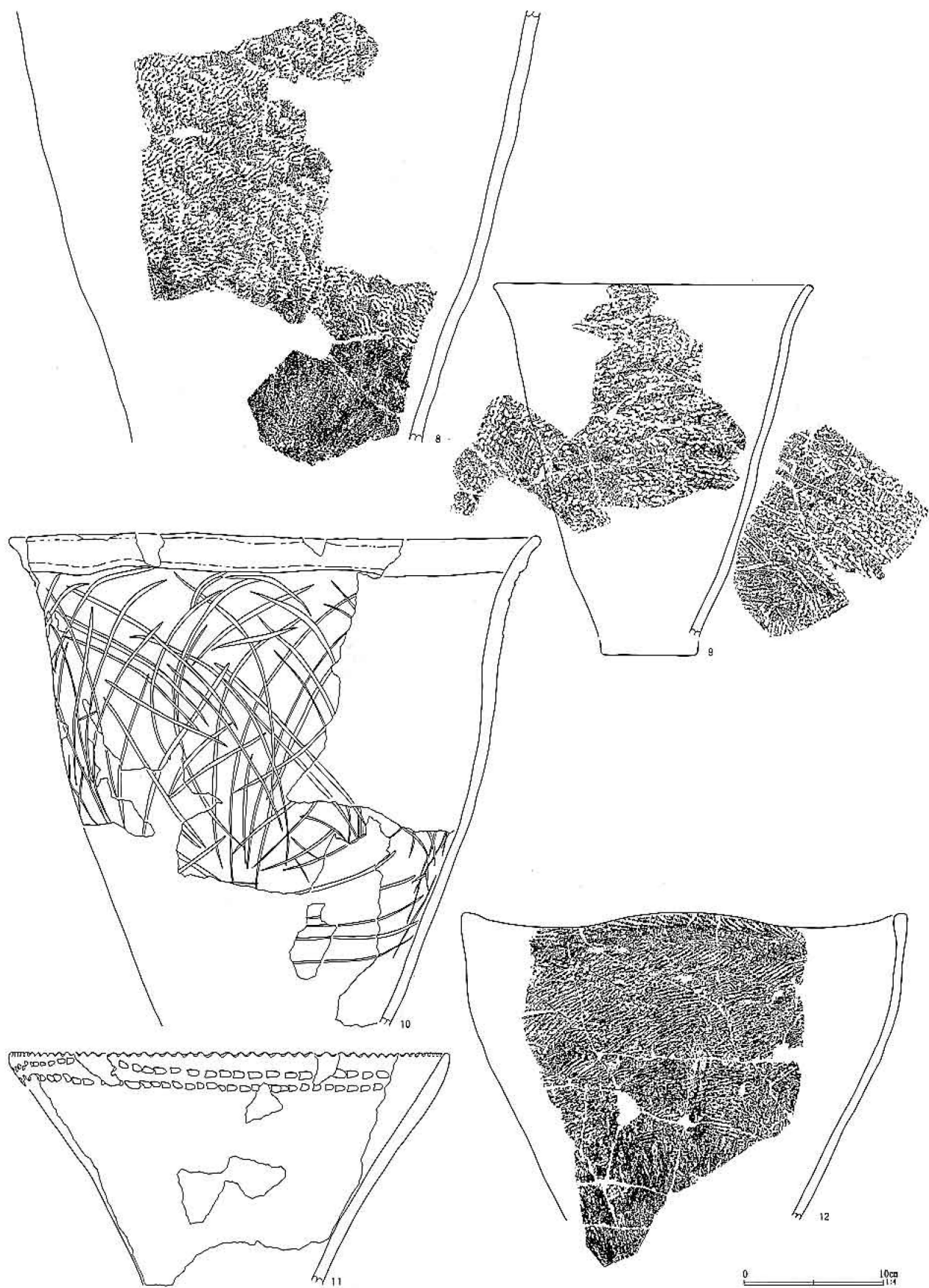
#### Ⅲ－第2類（1・2・33～38）

集合沈線を地文に多くの貼付文で加飾するもので、西関東の諸磯c式を象徴する類型である。36までは胴部で鋸歯文帯と縦位線文帯を交互に配置するも



第21図 第4号住居跡出土遺物（1）





第22図 第4号住居跡出土遺物（2）



のだが、1のみ丸形貼付上に刺突を加え、沈線帯の交差部など、要所に限って貼付を施している。

対して、貼付文に刺突を加えないものは、33の棒状貼付の口縁部を除き、やたらと貼付が加えられている。また、37・38は、貼付こそないものの、沈線の施文法から、同類と判断した。

### Ⅲ－第3類 (39～41)

第2類より浅く細い集合条線を地文とし、押引きを加えた縦位の短い貼付で加飾するもので、出土量は少ない。

### Ⅲ－第4類 (42～45)

外反する波状口縁の下に対となる渦巻文を配するもので、ここでは、いわゆるキャタピラ文で施文がなされている。同個体の破片は覆土上層から確認面、その周囲の遺構範囲外や第2号住居跡などの上層からも出土しており、堅穴埋没の最終に当地周辺に大破片が投棄されたと考えられる。

これらの破片を総合すると、内折する口縁上端に蛇行隆帯を貼付したトロフィー形の器形が想定できる。また、双渦巻き間を補填する何らかの構図がある気配だが、具体的には復元できなかった。

### Ⅲ－第5類 (46～50)

ヘラ切り沈線や結節沈線などで渦巻きや弧線を主構図とする文様を描くもので、46の破片上端には沈線間の陰刻が一部残る。その他の刺突系列施文は、破片が小さく、詳しい構成が想定できない。

### Ⅲ－第6類 (51～56)

集合沈線で横帯幾何学文を構成するものとしたが、51の小貼付文土器は単段の横帯しか構成しないものかも知れない。また、52も第4類の非刺突系施文の個体ともとれる。

これに対し、54～56は同一個体で、施文の特徴から、遺構外第35図139などにも通じる。第4類とともに、埋没最終期にまとまって投棄されたものと考えられる。別個体の53とともに、西関東十三菩提式初頭か直前の所産と考えられる。

第Ⅳ群土器 (3～16・18・57～232・第19図1)

前期後半の東関東・常磐に隆盛した系譜の土器で、ここでは興津式、あるいはその直後がもっぱらである。出土相の主体であり、第Ⅲ群よりやや砂質感が強いのが胎土の特徴である。

### Ⅳ－第1類 (3・57～66)

口縁から胴上半に特別な構図帯を設けるもので、沈線や爪形文で描かれるものと、区画貝殻文の二通りがある。57～60は前者で、57は変形爪形文による上位の区画帯である。他は上位区画がないものだが、やはり鋸歯の連接か菱形が描かれている。

一方、後者には3・61～66が相当するが、そもそも端正で規則的な区画文を構成しない気風のため、器形が復元できた3でさえも全体の構図がはっきりとしない。3と61は同一個体であり、余白に縦位の爪形文が充填されている。

### Ⅳ－第2類 (4～9・67～163)

貝殻による支点移動施文が主体となるもので、浮島・興津系内の出土比では格段の高率を占める。このうち、4・67～70は沈線と併用されるもので、沈線を意識して貝殻文が施文されているようだが、3のように、特別な構図を目論んだとは思えず、第1類とは区別できる。

施文貝の主流は、サルボウなど、肋脈のある二枚貝で、71～84は腹縁を押圧するように支点移動を重ねている。だがこれは、あくまで実物を前にした主観で、85以下の貝を引きずるものとの厳正な区分や、属性の違いが見て取れるわけではない。そして、あくまでその範囲での傾向だが、これらには上層や確認面で出土したものが多い。

5～8・85～137が支点移動の際に貝を引きずったと判断したものである。だが、施文の深さを強調するためにこれを用いた7や、肋脈痕を連続刺突状に並べる6・8・136などの極端な例は、明らかに意識的な手法として認められるが、その多くは無意識裏に行われたものだろう。ほとんどすべてがD字の弧を描き、6・8のように施文位が右肩上がりになりがちなのが特徴である。口縁部には刻み、刺